山形県埋蔵文化センター調査報告書第34集

向田遺跡
発掘調査報告書

1996

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

向田遺跡
（むかいだ）

発掘調査報告書

平成８年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、向田遺跡の調査成果をまとめたものです。

向田遺跡は山形県北西部の酒田市に所在し、「出羽富士」の異名を持つ鳥海山を仰ぎ見る肥沃な穀倉地帯である庄内平野北半分のほぼ真ん中に位置します。遺跡のすぐ北側には鳥海山の雪解け水を集め、麓を潤す日向川が流れ、東南約７kmには古代出羽国の国府と擬定されている国史跡、城輪柵跡が、同じく東南約３kmには中世留守氏の居館であった県史跡、新田目城跡などの様々な遺跡が近隣にあります。

この度、県営ほ場整備事業・西荒瀬地区に伴い、工事に先立って向田遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、平安時代初頭から中頃にかけての遺物とともに掘立柱建物跡や井戸跡などの遺構が検出されました。その内容は本報告書に書き留められたとおりです。自然地形に沿って立地する建物、それを取り巻くように配置された畑跡と想定される畝状遺構など、当時の人々の暮らしぶりに思いを馳せることが可能です。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、先祖が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民財産といえます。この先祖から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えて行くことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及・学術研究・教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成８年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター
理事長　　木　場　清　耕

例　言

1　本書は山形県庄内支庁経済部最上川右岸土地改良事務所の県営ほ場整備事業（西荒瀬）地区に係る「向田遺跡」の発掘調査報告書である。

2　調査は山形県教育委員会の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3　調査要項は下記のとおりである。

遺跡名　　向田遺跡（ＡＳＴＭＤ）遺跡番号　平成６年度登録
所在地　　山形県酒田市大字本楯字向田
調査期間　　発掘調査　平成７年４月１日～平成８年３月31日
　　現地調査　平成７年５月８日～平成７年７月６日
調査主体　　財団法人山形県埋蔵文化財センター
発掘調査・整理作業担当者
　　調査第一課長　　佐々木洋治
　　主任調査研究員　野尻　　侃
　　調査研究員　　石井　浩幸
　　調査研究員　　斉藤　　健

4　発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県庄内支庁経済部最上川右岸土地改良事務所、日向川土地改良区、酒田市教育委員会等関係機関の協力を得た。

5　現地調査における平面図（1/20・1/40・1/100）の作成は空中写真測量によっても行いその業務を株式会社パスコに委託した。

6　本書の作成・執筆は石井浩幸、斉藤　健が担当した。編集は尾形與典が担当し、全体については佐々木洋治が監修した。

7　出土遺物、調査記録類については財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　例

1　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は以下のとおりである。

ＳＢ……掘立柱建物跡　ＳＫ……土　壙　ＳＧ……河川跡
ＳＤ……溝跡　畝状遺構　ＥＢ……柱　跡　ＳＰ……ピット、小穴
ＳＥ……井戸跡
ＲＰ……登録土器　ＲＱ……登録石製品　ＲＭ……登録金属製品
ＲＷ……登録木製品　Ｐ……土　器　Ｓ……礫　Ｗ……木製品

2　遺構番号は現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲したが、土壌については本書で新たに付したものがある。

3　報告書の執筆は下記のとおりである。

(1)　調査概要図　遺構配置図　遺構平面図中の方位は磁北を示している。

(2)　調査区に設定したグリッドの南北軸はＮ－10°－Ｅを測る。

(3)　遺構実測図1/20・1/40・1/80・1/400で採録し、それぞれにスケールを付した。

(4)　土層観察においては、遺跡を覆う基本層序をローマ数字で表し、遺構覆土はＦを付して区別した。

(5)　本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。

(6)　遺物実測図・拓影図は1/2・1/4・1/10縮尺で採録したが、遺物図版に関しては1/3を基準とした。そしてそれぞれにスケールを付した。

土師器・あかやき土器の断面は白抜き、須恵器についてはベタ黒で表示し、瓦片・中世陶器はスクリーントーンで表示した。

(7)　堆積土層・遺構覆土の色調記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新基準土色帖』に拠った。

目　次

Ⅰ　調査の経緯
　1　調査に至る経緯……1
　2　調査の経過……1
　3　調査の概要……3
Ⅱ　遺跡の立地と環境
　1　自然環境……4
　2　歴史的環境……4
　3　遺跡の層序……6
Ⅲ　遺　構
　1　遺構の分布……8
　2　掘立柱建物跡……11
　3　土　壙……12
　4　井　戸……15
　5　溝　跡……19
　6　畝状遺構……20
　7　河川跡……20
Ⅳ　遺　物
　1　土　器……23
　2　土製品……24
　3　石製品……24
　4　木製品……24
Ⅴ　まとめ
　1　調査のまとめ……32
　2　庄内地方の井戸跡について……32
報告書抄録……35

挿　図

第１図　遺跡位置図
第２図　調査概要図
第３図　土壌分布・自然地形図
第４図　遺跡層序図（中央部　南壁西壁）
第５図　遺構配置、埋没河川図
第６図　遺構実測図(1)　ＳＢ１建物跡
第７図　遺構実測図(2)　ＳＫ453
第８図　遺構実測図(3)　ＳＫ96・ＳＫ128
第９図　遺構実測図(4)　ＳＫ497
第10図　遺構実測図(5)　ＳＥ108
第11図　井戸板材実測図(1)　ＳＥ108
第12図　井戸板材実測図(2)　ＳＥ108
第13図　遺構実測図(6)ＳＤ１・ＳＤ26　ＳＤ113
第14図　遺構実測図(7)　ＳＤ142・畝跡
第15図　遺構実測図(1)　土器実測拓影
第16図　遺構実測図(2)　土器実測拓影
第17図　遺構実測図(3)　土器実測拓影
第18図　遺構実測図(4)　石製品実測他
第19図　遺構実測図(5)　木製品
第20図　井戸跡分類図

表

表－１　検出遺構一覧
表－２　井戸板材観察表　ＳＥ108
表－３　遺物観察表(1)
表－４　遺物観察表(2)
表－５　庄内地方井戸跡出土例一覧

図　版

図版１　航空撮影・調査風景
図版２　掘立柱建物跡　柱穴
図版３　土壙検出状況
図版４　溝跡　畝跡等検出状況
図版５　井戸跡検出状況　ＳＥ108
図版６　出土遺物(1)　土器
図版７　出土遺物(2)　土器
図版８　出土遺物(3)　木製品・井戸板材

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経緯

酒田市の北部、庄内平野の中央に位置する本楯地区は水稲の盛んなところで、広々とした水田が広がっている。中心にある本楯集落には出羽留守所と云われる県史跡『新田目城』があり、さらに東方２kmの地点には出羽国府とされる国史跡『城輪柵』が存在する。これらのことから、この一帯は古代には政治経済の拠点的な場所だったことが伺われる。それを裏づけるように周辺からは50カ所を越える遺跡が発見されている。このような地域の歴史の中で、『城輪柵』、『新田目城』に近い向田遺跡は、つながりや結びつきを捉える上でも貴重な遺跡である。近年、庄内では大規模なほ場整備事業等の開発が行われ、遺跡が直接・広範に影響を受けるようになり、遺跡保護が課題となっている。今回の調査も本年度に実施される県営ほ場整備事業（西荒瀬地区）を原因としている。ほ場整備に先だって遺跡の保護や範囲を調べるために、山形県教育委員会は、平成６年秋に遺跡の詳細分布調査を実施した。その結果、向田遺跡の存在が知られ、一部破壊されている部分はあるものの、遺跡面積は約10,000万㎡に及ぶことが分かった。その後、保存や施工方法について協議がもたれた。しかし、止むを得ず壊れると判断された部分については記録保存を目的とした緊急調査が計画され、(財) 山形県埋蔵文化財センターが主体となって調査実施の運びとなったものである。

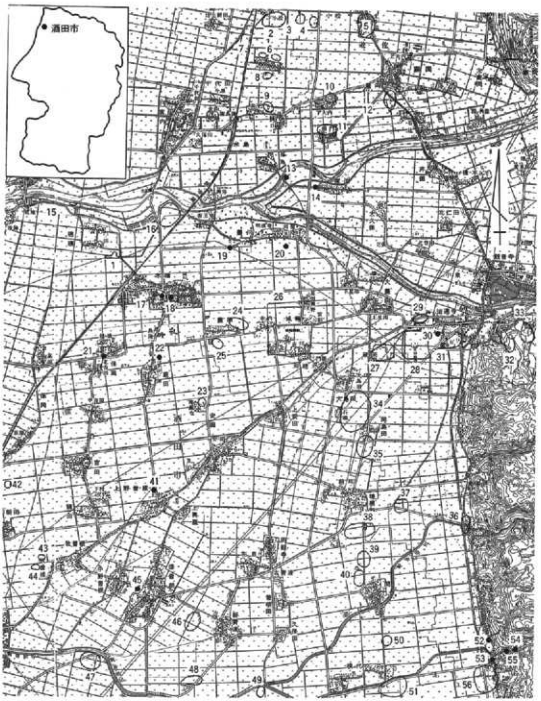
2　調査の経過

調査は、遺跡域の削平される部分の3,500㎡を対象として実施した。調査区の設定から始めて、表土の除去、面整理、遺構検出他一連の手順で進めた。以下各作業の工程と経過を略記しておく。

平成７年５月８日、発掘器材の搬入と現場事務所の整理を行い、午後に関係者により鍬入式を行った。その後調査区の設定を行い、９日から重機による表土除去を始めた。５月10日から面整理を開始した。17日に調査区に10m×10mのグリッド（方眼区画）を設定し、面整理を継続した。調査区をＡ～Ｅ区に区分し、Ａ区から遺構の検出とマーキングを実施した。

６月１日　遺構検出に並行してマーキングした遺構の平面図（1/100）を作成していった。
６月８日　Ｂ区の溝跡から遺構の精査を開始した。併せて精査した遺構の記録と出土遺物の取上げを続けた。６月８日以降、遺構・遺物の精査を続行し、平面・断面図作成、写真など諸記録作業と航空撮影による遺構測量（６月30日）を行った。また一般の方々を対象に、現地での調査説明会（６月29日・参加者110名）を開催した。遺構精査の最後には、河川跡のトレンチ掘りを実施し、地形の堆積状態についても調査した。

７月６日には、井戸跡等一部埋め戻しと調査事務所の撤収を行い、予定通り調査を終了した。午後には土地改良事務所の立会いのもと現地の引き渡しを行った。10月から出土した遺物の整理作業と報告書作成を始めた。



国土地理院発行２万５千分の１地形図「酒田北部」「羽後観音寺」を縮小して使用

0　1km
(1：50,000)

第１図　遺跡位置図

1．向田遺跡　2．前田遺跡　3．地正面遺跡　4．塚田遺跡　5．長田遺跡　6．山道畑遺跡　7．水上Ｃ遺跡
8．水上Ａ遺跡　9．宮下遺跡　10．村前遺跡　11．前門遺跡　12．橋畑遺跡　13．塚渕Ａ遺跡　14．塚渕Ｂ遺跡
15．門出遺跡　16．若王寺遺跡　17．県指定史跡・新田目城跡　18．新田目Ａ遺跡　19．新田目Ｂ遺跡　20．明成寺遺跡
21．前田遺跡　22．庭田遺跡　23．安田遺跡　24．豊原遺跡　25．豊原Ｂ遺跡　26．国指定史跡・城輪柵跡
27．後田遺跡　28．堂の前遺跡　29．茅計谷地遺跡　30．沼田遺跡　31．橋掛遺跡　32．八森Ｂ遺跡　33．八森Ｃ遺跡
34．沼田遺跡　35．俵田遺跡　36．北境遺跡　37．上ノ田遺跡　38．境興屋遺跡　39．北田遺跡　40．関Ｂ遺跡
41．上野曽根遺跡　42．中谷地遺跡　43．東割遺跡　44．梵天塚遺跡　45．法曽根遺跡　46．新青渡遺跡　47．船止遺跡
48．南興野遺跡　49．早塚遺跡　50．高阿弥陀遺跡　51．横代遺跡　52．関道遺跡　53．条口遺跡　54．矢流川Ａ遺跡
55．矢流川Ｂ遺跡　56．生石２遺跡

3　調査の方法

向田遺跡は面積約10,000㎡あり、東西に長く広がる範囲にある。そのため遺跡の北西に任意に測量基準原点を設定し、座標第３象限の枠組みで調査区域を区分した。東西南北に10ｍごとに杭を打ち、アラビア数字を番号順に付してグリッド番号とした。

調査区内の標高は、調査区南側のＢＭ１杭、ＢＭ２杭（標高7.00ｍ）を基準として標高移動をして、記録作業に利用した。

調査範囲は、東西に不規則に延びるため、東側からＡ～Ｅ区に区分しＡ区から作業に着手した。

調査区内の遺構については１/10・１/20・１/100の縮尺で平面図・断面図を実測を行った。

写真は、原則として35ｍｍカメラ用のカラーネガとカラーリバーサルフィルムの双方を用いて撮影記録を行った。このほか遺跡全体にわたって空中写真測量を実施した。全体の正確な地形や遺構配置・標高等を記録し、１/100・１/40・１/20の測量図面を作成した。

遺物の取上げはグリッド杭の設置以前は包含層の上下位の層位ごとに区分し、設置後は各グリッドごとに行った。一括遺物・重要遺物については遺物記号を付して地点・レベル等を記録している。一方遺構内からの出土遺物は覆土層位に従って「Ｆ１」等の表記で取り上げ、重要なものは遺物記号を付した。検出遺構は、検出順や建物跡等のまとまりを考慮して通し番号をつけ、１/100地図と台帳等に記録した。

第２図　調査概要図

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　自然環境

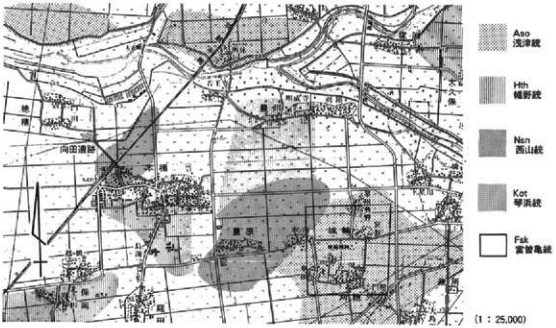
向田遺跡は庄内平野の北部、酒田市街の北東10km本楯集落と門田集落の中間に存在する。標高は約７ｍの河間低地で、荒瀬川・日向川等による小規模の自然堤防と考えられる微高地上にある。現在、日向川は遺跡の北側を西流している。現在、遺跡一帯は、広々としたほ場が広がる水田地帯となっている。

庄内地方は海洋性の気候であり、一日の気温の変化が少ない。しかし、冬季間には季節風（地吹雪）の日数が多くなり、主要道にはところどころに防御フェンスが設置されている。さらに海上からの北西風が卓越すると太陽の日照は10日間に２～３日も射さない。本楯・門田集落にはケヤキなどの屋敷林が多く見られ、防風施設にもなっている。

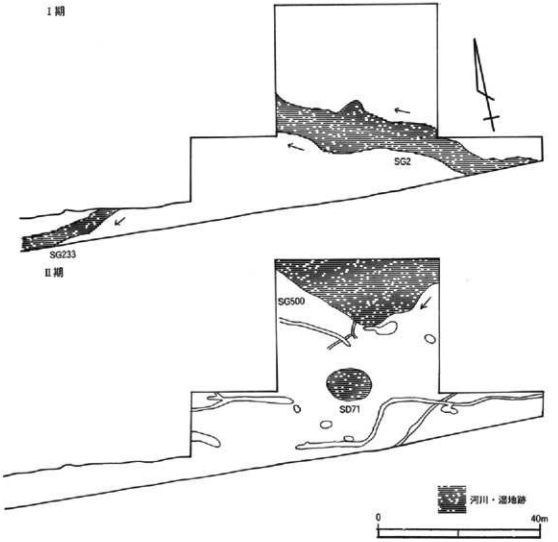
本楯付近は、長い間低湿地であったと思われ、日向川、荒瀬川により緩やかな自然堤防、広い氾濫原を形作っている。酒田周辺の集落は旧河川跡の自然堤防上に立地していることが多く、東西に細長く集落が伸びている。遺跡の立地も同じ傾向を見せている。土壌分類図（1987年『土地分類基本調査』山形県）によれば、酒田市『城輪柵』遺跡周辺の土壌は５種類に区分されている。いずれも水成堆積物によるもので、耕作土の下はグライ化層になっている。旧河川に沿う形で自然堤防が発達し、遺跡の多くはこの上に立地している。向田遺跡は「琴浜統（中粗粒強グライ土壌）」に相当する。この土壌は、非固結堆積岩を母材とし、地下水位が高く全層または耕作土直下よりグライ層となる。土色は青灰色で土性は粗粒質である。地表下50cmで、埋没した木々が出土することがある。周辺は開墾前は小河川が網の目のように流れていたと考えられ、近世の絵図などでも確かめられる。向田遺跡の調査でも２時期にわたる小河川の跡が確認できた（第３図）。

2　歴史的環境

これまでの発掘調査の結果から鮑海郡域の遺跡分布を見てみると、縄文時代の遺跡は標高の高い丘陵上を中心に分布している。弥生時代から奈良時代の遺跡数は、かなり少なくなるが平野部の丘陵沿いに分布し、稲作の普及により平野部縁辺に生活の場所が移ったことが伺える。ただ平野部でも縄文時代や弥生時代の遺物が発見されることがあり、新たな視点で検討が求められている。このように時代を経るにしたがい、人々は標高15ｍの高い出羽丘陵上から低い平地に生活の場を移してきたことがわかる。平地は平安時代以降に開発が進んだものと推測される。文献資料によると、出羽国は和銅５年（712年）に越後国の出羽郡が昇格したものである。国府機能は出羽柵が果たしていたと考えられているが、現時点では出羽柵に該当する遺跡はまだ確認されていない。いわゆる「征夷」の進展と共に天平５年（733年）になると出羽柵は秋田に移り、天平宝字４年（760年）には秋田城が確認できる。その後、蝦夷との紛争激化により延暦23年（804年）秋田城は廃止され「河辺府」に移されている。延暦年中には「出羽郡井口」に国府が建設されており、仁和３年（887年）になると「旧府高畝之地」に移転した先が八幡町の八森遺跡、国分寺は堂の前遺跡という



向田遺跡周辺土壌分布（山形県1986「土地分類基本調査」酒田から）



第３図　土壌分布・自然地形図

脱があるが決定的な決め手はまだない。

鮎海郡域は平安時代初期に出羽国府が「出羽郡井口地」に秋田より移転した後に本格的に開発が始まったものと考えられている。出羽丘陵に点在する古代の窯跡はほとんどが平安時代に入ってから開かれたものであり、集落遺跡も９世紀以降に形成されたものがかなりの割合を占めている。また９世紀以降、史書に鮎海郡域の自然災害の記載が増える。このことは国府の移転により開発が進み、当地域の自然災害への関心が高まったためと言えよう。これらは本格的な開発が平安時代初期であったという傍証になる。

このように律令政府の政策により計画的に配置されたと考える古代集落は官衙との結びつきが非常に強かったものと推測される。しかし官衙遺跡の調査研究は必ずしも進んでいるとは言えず、まだまだ未解決の問題が山積みしている。基本史料となる文献史料に関しては記述内容で問題点も指摘されており、それらを解決する新しい史料の出現も期待できない。唯一残された手段が発掘調査である。個々の遺跡の遺構や遺物の検討から新しい事実や疑問点の解決につながると思われる。その意味でも向田遺跡の調査は重要な位置を占めることは確かで、徐々に人々の生活の様子が見えてくるのではないだろうか。

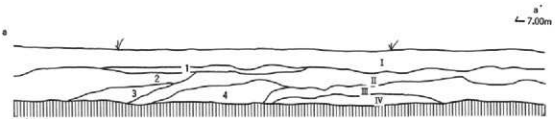
3　遺跡の層序

遺跡の位置する場所は、土壌分類によると中粗粒強グライ土に相当し、日向川等による水成堆積による地形になる。調査区一帯は戦後のほ場整備事業等により上層部の大部分は削られて移動している形跡が見られる。

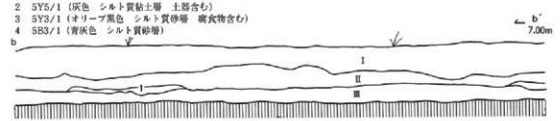
土層は基本的にⅠ層が耕作土、Ⅱ層が暗青灰色の粘土層、Ⅲ層は褐色シルト層となっており、遺構の確認はⅢ層上面にておこなっている。遺物はⅠ、Ⅱ層からも出土しているが耕作による攪乱により移動しているものと考えられる。本来の遺物の包含層はⅡ層とⅢ層の漸移層にある。ところによってⅡ層とⅢ層間に黒色土が入り込んでいるところがある。中世以降の遺構と想定される。また、Ⅲ層上面には牛耕作による足跡痕が多数残されている。層位から中世～近世のころと想定している。

遺跡中央部には古い河川跡が東西に見られるが、堆積土から遺物は検出されなかった。また砂層がレンズ状に堆積している様子が看取された。調査区の北側には、より新しい河川跡、中央部に湿地を形成していたことがわかった。北側の河川跡と湿地は泥炭化の進んだ状況を示している。

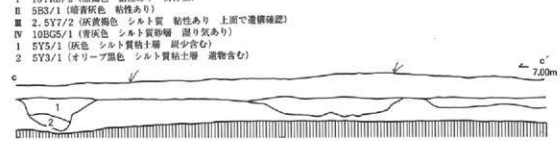
向田遺跡では、幾つかの遺構の覆土中から火山灰の堆積を認めることができる。ＳＫ96・ＳＫ453・ＳＥ108・ＳＤ26・ＳＤ71・ＳＤ300等の遺構中には２次的な火山灰堆積の様子が観察できた。これらの遺構の埋没していく過程で堆積していることがわかる。絶対年代や周辺遺跡との関連を探る上で興味深い。類似した火山灰は庄内一円で確認されており、理化学分析では十和田火山起源の降下火山灰と判定されている。しかし、なお問題点も指摘されており詳細にわたって追求していく必要がある。



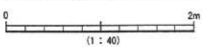
中央部層
Ⅰ　10YR3/2（黒褐色　粘性あり　耕作土）
Ⅱ　5B3/1（暗青灰色　粘性あり）
Ⅲ　2.5Y7/2（灰黄褐色　シルト質　粘性あり　上面で遺構確認）
Ⅳ　10BG5/1（青灰色　シルト質砂層　湿り気あり）
1　5B4/1（青灰色　粘土層）
2　5Y5/1（灰色　シルト質粘土層　土器含む）
3　5Y3/1（オリーブ黒色　シルト質砂層　腐食物含む）
4　5B3/1（青灰色　シルト質砂層）

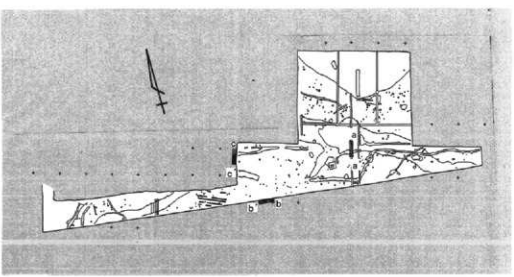


南側層
1　10YR3/2（黒褐色　粘性あり　耕作土）
Ⅱ　5B3/1（暗青灰色　粘性あり）
Ⅲ　2.5Y7/2（灰黄褐色　シルト質　粘性あり　上面で遺構確認）
Ⅳ　10BG5/1（青灰色　シルト質砂層　湿り気あり）
1　5Y5/1（灰色　シルト質粘土層　礫少含む）
2　5Y3/1（オリーブ黒色　シルト質粘土層　遺物含む）



西側層
1　10YR3/2（黒褐色　粘性あり　耕作土）
Ⅱ　5B3/1（暗青灰色　粘性あり）
Ⅲ　2.5Y7/2（灰黄褐色　シルト質　粘性あり　上面で遺構確認）
Ⅳ　10BG5/1（青灰色　シルト質砂層　湿り気あり）
1　5Y3/1（オリーブ黒色　シルト層　遺物含む）





※▒は層序記録位置

(1：800)

第４図　遺跡層序図

Ⅲ 遺 構

調査によって検出した遺構は総数501基にのぼった。主な遺構としては掘立建物跡・土壙・井戸跡・溝跡・柱跡・小穴・畝跡がある。これらの遺構はⅢ層上面で確認したもので、平安時代から中世にかけてのものとみられ、その他に沼跡や河川跡がある。また、牛による苗代掻きの痕跡も検出できた。以下、分布と個々の特徴について記述する。

1 遺構の分布

検出遺構の配置状況は第５図に示した。調査区の中央を斜めに横断する河川跡を中心として形成される自然堤防上に建物・井戸・土壙・溝跡他の平安時代に属する遺構群が東西に分布していることがわかる。建物跡や土壙は砂地を基本として埋積した河川跡（ＳＧ２）よりも後出のものである。ただＳＧ２河川跡も一部（ＳＤ71）は湿地として残されていたと考えられる。北側の河川跡（ＳＧ500）と西端の河川跡（ＳＧ499）は自然堤防の境界部に位置しており、これらの河川跡に囲まれる形で遺構が配置されている。また遺跡は東側と南側に広がる様子が伺えた。

大部分の遺構は自然堤防の高まりを中心に造られており、後世の耕作の影響も受け、部分的に遺構が攪乱されている。

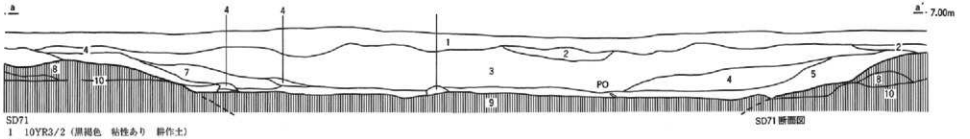
溝跡が22条確認されたが、この中でＳＤ181・ＳＤ113・ＳＤ142は埋土の状況から中世以降の所産と考える。畝跡とした遺構は５条まとまっており畑の痕跡と考えられる。

調査区全域から多数の小穴（ピット）が検出されている。径の小さいものがほとんどで稲杭等の跡が多数含んでいるようである。

遺構は、東西そして南側に広がる様子を呈しており、遺跡は東西方向と南方に広がっていくと考えられる。

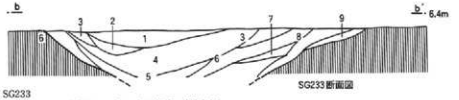
遺構の分類	グリッド位置	出土遺物 須恵器	あかやき	内黒	中世	近世	火山灰	備考
建物跡 1カ所								
ＳＢ１	5-14	2	2					
(柱跡８カ所確認)	6-14							
土壙 22カ所								
ＳＫ４５３	5-16、17	48	73	3			●	遺物多
ＳＫ９６	7.8-14						●	
ＳＫ４９７	5-15	96	220		1	1		瓦２点
ＳＫ２７	7-17	12	91	4				
ＳＫ３２	7-17		10					
井戸跡 1カ所							●	斎串
ＳＥ１０８	7-14							
溝跡 22カ所								
ＳＤ１		131	1008	37	1			
ＳＤ２６	7-16	20	79	5			●	
ＳＤ１１３	8-13、14	86	178	10				
ＳＤ１４２	7-11 12 13	58	338	13	1			
ＳＤ７１	6-14、15	191	780	7	2	2	●	湿地跡
ＳＤ１８１	7-10、11	2	6					
ＳＤ２６４	9-4		10					
ＳＤ３００	5-14	73	307	15			●?	
小穴４４７カ所								
畝跡 4カ所								
ＳＤ191 192	8.9-9							畑跡？
ＳＤ１９３	8.9-9							
ＳＤ１９４	8.9-9							
河川跡 4カ所								
ＳＧ２	調査区中央部							
ＳＧ２３３	8-8、9							
ＳＧ４９９	調査区西端						未確認	
ＳＧ５００	調査区北端							石器 縄文土器

表－１ 検出遺構一覧



SD71 断面図

SD71
1　10YR3/2（黒褐色　粘性あり　耕作土）
2　5B3/1（暗青灰色　粘性あり）
3　7.5YR4/3（褐色　粘性あり　土器含む　礫石出土）
4　5Y4/1（灰色　粘性あり　土器含む）
5　5Y4/1（灰色　粘性あり　土器含む）
6　7.5YR6/6（橙色　シルト質　粘性あり　土器含む）
7　2.5Y6/2と10YR4/2ブロック（灰褐色　粘性あり　シルト質）
8　5PB4/1（暗青灰色　シルト砂層）
9　7.5Y5/2（灰褐色　シルト層　粘性あり　礫石出土　上面に窪食物多い）
10　10BG5/1（青灰色　砂層）

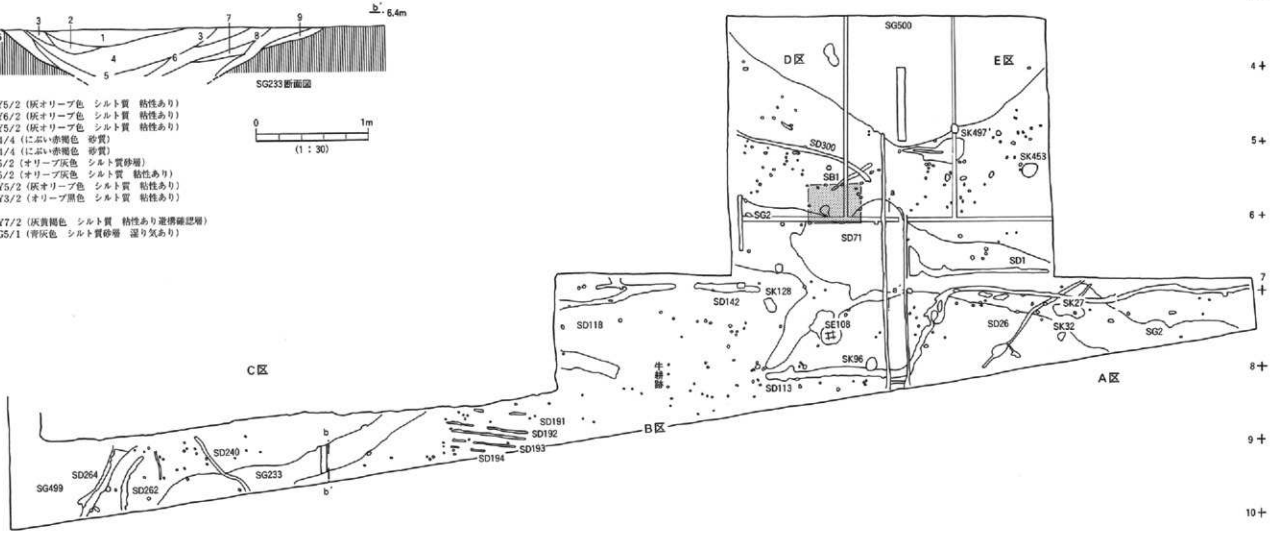


SG233 断面図

SG233
1　7.5Y5/2（灰オリーブ色　シルト質　粘性あり）
2　7.5Y6/2（灰オリーブ色　シルト質　粘性あり）
3　7.5Y5/2（灰オリーブ色　シルト質　粘性あり）
4　5YR4/4（にぶい赤褐色　砂質）
5　5YR4/4（にぶい赤褐色　砂質）
6　10Y5/2（オリーブ灰色　シルト質砂層）
7　10Y5/2（オリーブ灰色　シルト質　粘性あり）
8　7.5Y5/2（灰オリーブ色　シルト質　粘性あり）
9　7.5Y3/2（オリーブ黒色　シルト質　粘性あり）

Ⅲ　2.5Y7/2（灰黄褐色　シルト質　粘性あり遺構確認層）
Ⅳ　10BG5/1（青灰色　シルト質砂層　湿り気あり）

0　1m
（1：30）



遺物跡の配置場所

0　40m
（1：400）

第５図　遺構配置、埋没河川図

2 掘立柱建物跡（ＳＢ１）

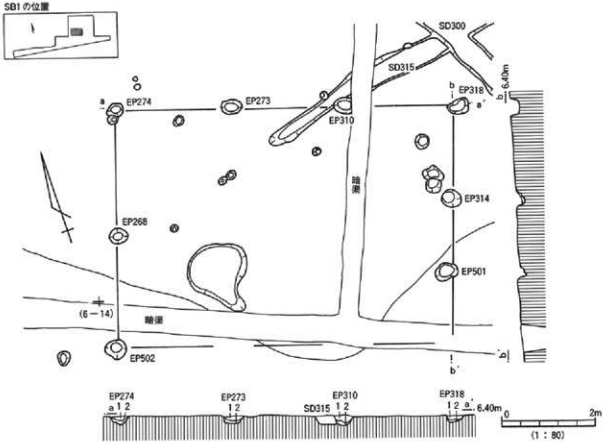
建物跡は調査区Ｄ地区に位置し、ＳＤ71（湿地跡）に隣接する。そのため土色の変化等によって南側の柱跡を確認することができなかった。柱穴の一部は溝跡（ＳＤ315）と重なり、切っていることから、これより新しいと考えられる。

プランは東側柱列が３間、北側柱列は３間、西側柱列は２間分確認された。これらから判断すると桁行き３間（総長7.4ｍ）梁行き２間（総長5.2ｍ）である。西側柱穴間距離は2.64ｍ北側柱穴間距離は2.4ｍある。建物長軸方向はＥ－28°－Ｓである。

柱穴は掘り方が径30cm～40cmの円形、柱痕跡が15～20cmの円形を基調としているが明瞭にわかるものは少ない。堆積層は２層ほどあり、柱穴痕には炭化物・炭片が見られる。遺物は少なく、あかやき土器片が数点出土したにとどまる。

調査区全体から、柱穴と思われるものが447ヵ所見つかっているが、建物に関わるものとして確認したのはＳＢ１だけである。建物の配置を示すところはなく、径も小さいことから、稲杭等の痕跡が大部分を占めていると考える。

建物跡の確認は１ヵ所だけであったが、調査区外、東西に存在している可能性が高い。



EP274
1 7.5Y4/1（灰色 シルト質 炭あり）
2 7.5Y5/2（灰オリーブ色 シルト質）

EP273
1 7.5Y4/1（シルト質）
2 7.5Y5/2（シルト質）

EP310
1 7.5Y4/1（灰色シルト質 炭あり）
2 7.5Y5/2（灰オリーブ色 シルト質）

EP318
1 7.5Y4/1（灰色 シルト質 炭あり）
2 7.5Y5/2（灰オリーブ色 シルト質）

第６図 遺構実測図(1)ＳＢ１建物跡

3 土　　壙

土壙（大きく掘り込んだ穴）は22基確認された。最大のものは径320cm、最小は96cmを測る。また、掘り込まれた深さも様々である。土壙内からの遺物の出土数、種類もそれぞれ違う様子を示している。以下、主な土壙について規模や出土遺物堆積状況について、その概略を述べる。

ＳＫ453（第７図）　Ⅲ層上面で確認された。土壙全体を検出し、他の遺構との重複はない。平面形はほぼ円形をなす。規模は長軸210cm、短軸180cm、深さが66cmである。堆積土は15層に分けられ、自然堆積層である。第２層には火山灰がレンズ状に堆積している。底面は皿状を呈し、壁の立ち上がりは緩やかである。ここからは総数124点の遺物がまとまって出土した。いずれも底面近く、壁面に沿う状態で出土した。礫も12点出土した。遺物は土壙の底に投げ捨てられたようであり、復元して完形にいたるものはない。

ＳＫ96（第８図）　Ⅲ層上面で確認された。土壙全体を検出し、溝跡（ＳＤ113）と重複している。平面形はほぼ円形をなす。規模は長軸166cm、短軸148cm、深さが46cmである。堆積土は６層に分けられ、自然堆積層である。第３層には火山灰粒が堆積する。底面は皿状を呈し、壁の立ち上がりは緩やかである。ここからは129点の遺物が出土した。遺物は覆土中（Ｆ２、３）から出土した。礫も２点出土した。なお、底面より埋没した自然木を確認した。土壙南側に延びて埋まっているようである。

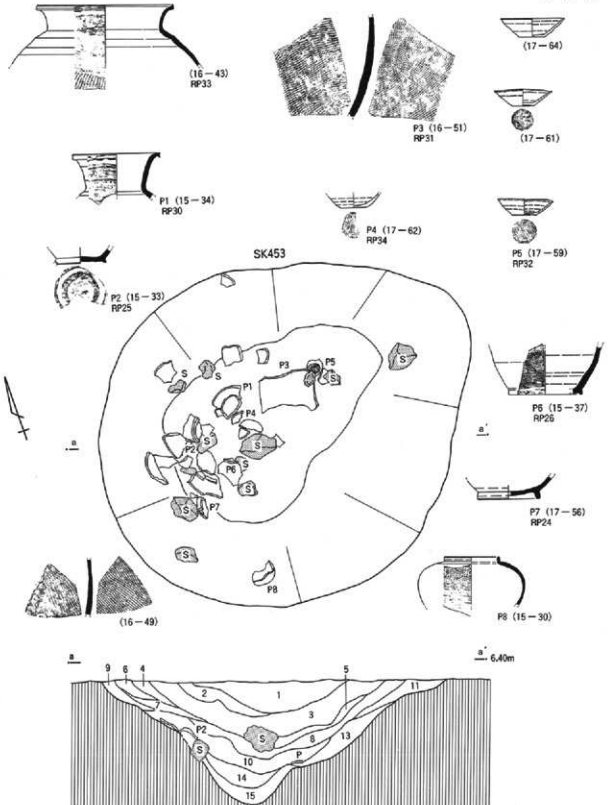
ＳＫ128（第８図）　Ｂ区北側、ＳＤ142のそばに位置する。平面形は方形をなす。長軸100cm、短軸54cm、深さ15cmを測る。断面は『U』字形に近い。堆積土は２層あり、人為堆積土と思われる。土色から中世以降の遺構と考えられる。堆積土中からは、礫２点と木製品１点出土した。

ＳＫ497（第９図）　調査区の北側中央部、５－16グリッドに位置する。平面形は不整楕円形をなし長軸は320cm短軸は128cmを測る。深さは13cmあり、２層の堆積土が見られた。２層ともに自然堆積層と考えられる。中央部に幅25cm長さ510cmの木材が出土したが、腐食が激しく形態を把握するにとどまった。堆積層からは須恵器片96点・あかやき土器片220点・中世陶磁器片２点と瓦片２点が出土した。

ＳＫ27　Ａ区中央、ＳＤ１に沿って位置する。ＳＤ１によって切られており、溝が掘り込まれる以前の所産と考えられる。深さは15cmと浅く、堆積層も２層で砂が多い。須恵器10点・あかやき土器40点出土している。土器片はいづれも細片である。

ＳＫ32　ＳＫ27の南側に位置する。長軸104cm、深さは24cmを測る。あかやき土器が10点出土している。

ＳＫ56　ＳＤ１に近接する。長径120cm、深さ20cmを測る。堆積層は１層で赤褐色の酸化鉄の砂が多量含まれている。須恵器片２点、あかやき土器片11点が出土している。



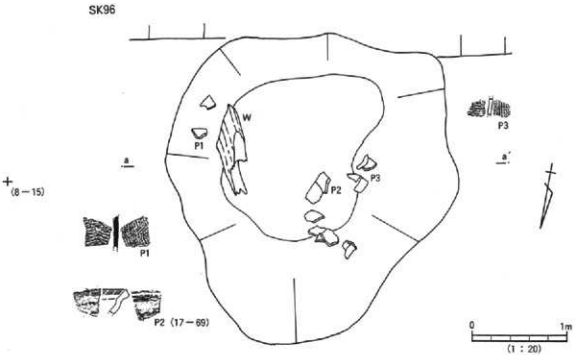
SK453

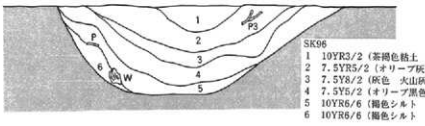
1　7.5Y3/2（茶褐色シルト　炭少　粘性あり）
2　10YR7/4（黄橙色　炭少　粘性あり　火山灰が入る）
3　7.5Y3/2（茶褐色　炭少　礫含む）
4　7.5Y4/1（灰色　炭少）
5　7.5Y3/2（オリーブ黒色　酸化物　粘性あり）
6　10Y4/2（オリーブ灰色　炭少　粘性あり）
7　7.5Y4/1（灰色　粘性あり）
8　7.5Y4/3（暗オリーブ色　土器含む　酸化物　粘性あり）
9　10YR6/6（褐色シルト　P1ブロックで入る　粘性あり）
10　7.5Y5/1（灰色　土器含む　炭あり　粘性あり　繊維物あり）
11　7.5Y5/1（P9と同じ）
12　10YR6/6（褐色シルト）
13　5Y6/3（オリーブ黄色　炭あり　粘性あり　繊維物あり）
14　7.5Y3/1（オリーブ黒色　泥炭化　水分含む）
15　7.5Y3/2（オリーブ黒色　泥炭化　水分含む）

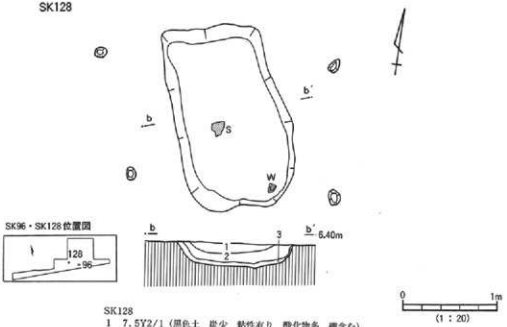
0　1m
(1：20)

SK453の位置

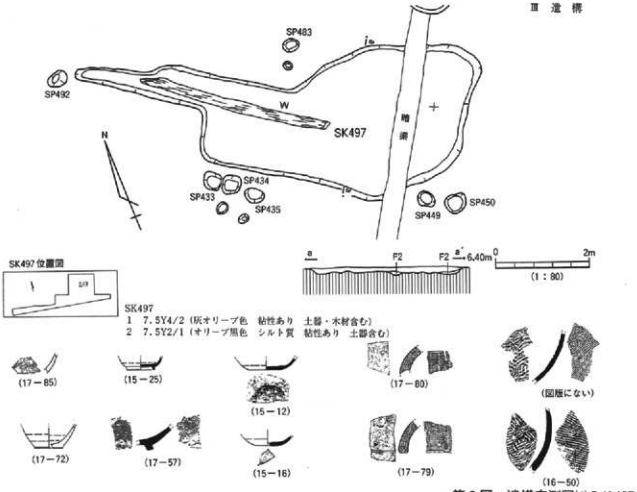
第7図　遺構実測図(3)ＳＫ453







第８図 遺構実測図(3)ＳＫ96・ＳＫ128



第９図 遺構実測図(4)ＳＫ497

4 井戸跡（第10図）

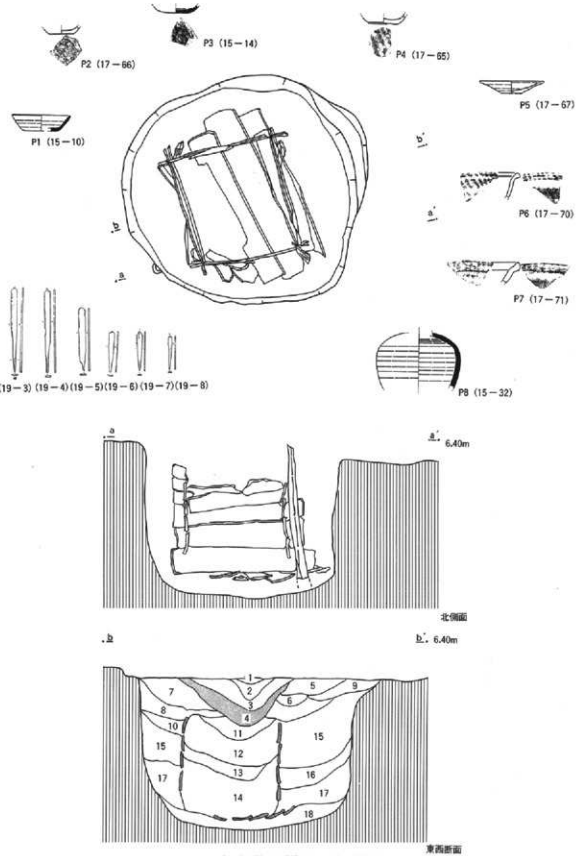
井戸跡（ＳＥ108）はＢ区の東側に位置している。遺構検出面はⅢ層上面である。ＳＤ71と北側で切り合い関係にある。遺存状況は井戸枠の一部を除いて良好である。確認できた建物跡（ＳＢ１）とは直線距離にして15ｍほどある。

井戸跡は掘り方と中央に据えられた方形の井戸枠からなっている。

掘り方は平面形が長軸241cm、短軸205cmの円形を呈している。周壁の立ち上がりはほとんど垂直となっている。底面は検出面より130cmの深さであるが井戸枠の周囲はさらに20cｍ程に掘り込まれており、水溜めの用途に用いたものと考えられる。

井戸枠は掘り方の中央で周壁よりも約50cｍ内側に設置されている。平面形は一辺が1.2ｍの方形である。主軸方位はＮ－16°－Ｅとなる。遺構検出面から隅柱が確認できたことから上端から下端まで1.2ｍはあったと考えられる。井戸枠は６段組んだ状況が確認できたが、堆積土中から崩壊し腐れかかっている板材が出土していることから６段以上に組んでいたものと考えられる。

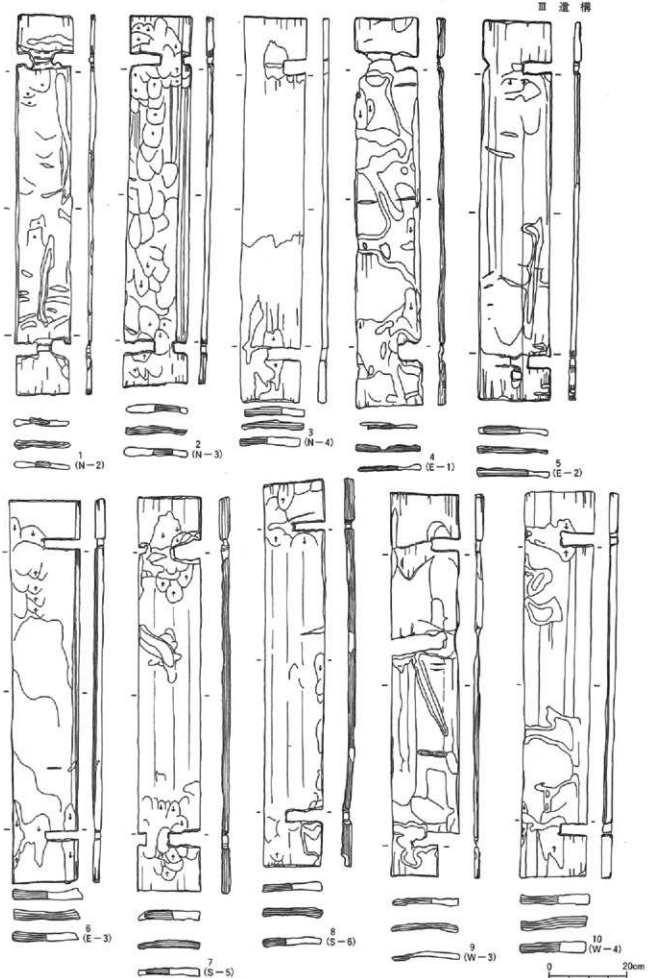
井戸掘り方部分の埋土は４枚の堆積層が認められる。人為的に埋められたため、褐色シルトと粘土ブロックなどが混じっている。Ｆ４層は乳白色火山灰層で流れ込みによる２次的な堆積層である。Ｆ17層からは涌水がみられ、泥炭質シルト層になっている。井戸跡からは、斎串６点と箸10点と須恵器の坏・壺、あかやき土器の坏・甕の破片が出土した。井戸枠はいずれも『スギ』材を利用している。加工痕等があり建築部材転用の可能性が高い。



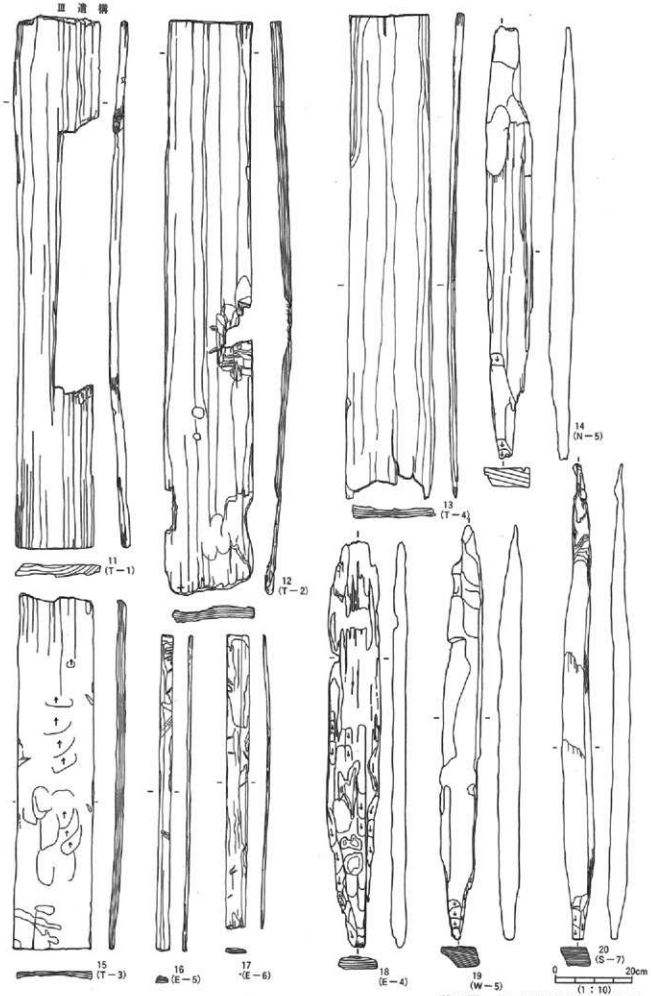
SE108
1 5G2/1（褐色粘土ブロック含む 炭あり 粘性あり）
2 10G2/1（黒色土 炭あり）
3 7.5Y4/1（茶褐色シルト 粘性あり 酸化物多い）
4 7.5Y8/2（灰白色 火山灰の流れ込み）
5 7.5Y4/1（灰色 炭あり 土器含む）
6 7.5YR8/4（浅黄橙色 褐色粘土のブロックあり）
7 7.5Y5/2（暗灰黄色 炭あり 粘性あり 酸化物含む）
8 7.5Y4/1（灰色 炭あり 粘性あり 土器含む）
9 7.5Y5/2（灰オリーブ色 褐色粘土ブロック入る 粘性あり）
10 7.5Y5/1（灰色 粘性あり 酸化物含む）
11 10GY4/1（灰色 粘性強い 泥状 土器出土）
12 10GY4/1（灰色 粘性強い 泥状 木製品出土）
13 10GY3/1（暗灰色 泥炭質 泥状 木製品出土）
14 10GY3/1（暗灰色 泥炭質 泥状）
15 10GY4/1（灰色 泥状）
16 7.5GY4/1（緑灰色 泥状 砂含む）
17 7.5GY4/1（緑灰色 砂含む）
18 7.5GY4/1（緑灰色 青砂多い）

0 50cm
(1：25)

第10図 遺構実測図(3) S E 108



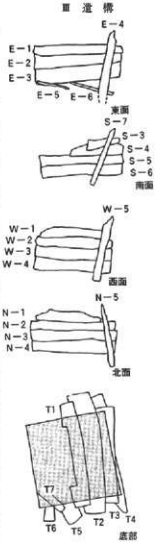
第11図　井戸板材実測図(1)SE108



第12図　井戸板材実測図(2)SE108

遺物番号	種別	井戸内の位置	計測値 mm				調整			備考
			最大長	最大幅	厚さ	内寸	表面	切断部	溝部	
1	井戸枠	N－2	999	143	25	715	手斧 鉋	ノコ痕	ノコ痕	両側辺に溝
2	井戸枠	N－3	977	170	28	730	手斧 鉋	ノコ痕	ノコ痕	両側辺に溝
3	井戸枠	N－4	1,100	164	22	721	手斧 鉋	ノコ痕	ノコ痕	片側に溝
4	井戸枠	E－1	1,073	172	21	716	手斧 鉋	ノコ痕	ノコ痕 のみ?	片側に溝
5	井戸枠	E－2	990	188	22	740	手斧 鉋	ノコ痕	ノコ痕	片側に溝 穿孔あり
6	井戸枠	E－3	1,000	185	27	740	手斧 鉋	ノコ痕	ノコ痕	片側に溝
7	井戸枠	S－5	1,031	167	28	716	手斧 鉋	ノコ痕	ノコ痕	両側辺に溝
8	井戸枠	S－6	1,008	163	25	733	手斧 鉋	ノコ痕	ノコ痕	片側に溝
9	井戸枠	W－3	1,002	180	21	730	手斧 鉋	ノコ痕	ノコ痕	中央部に大きな切り込み
10	井戸枠	W－4	1,000	178	25	722	手斧 鉋	ノコ痕	ノコ痕	片側に溝
11	底板	T－1	1,395	225	30		手斧 鉋	ノコ痕	ノコ痕	中央部片側に溝
12	底板	T－2	1,503	232	30		手斧 鉋	ノコ痕	ノコ痕	中央部片側に溝
13	底板	T－4	1,262	230	32		手斧 鉋	ノコ痕		
14	隅柱	N－5	1,134	110	51		手斧 鉋	ノコ痕		先端部手斧ケズリ
15	底板	T－3	927	204	22		手斧 鉋	ノコ痕		
16	補強材	E－5	826	22	12		手斧 鉋	ノコ痕 折れ		両面に細いキズ
17	補強材	E－6	769	60	8		手斧 鉋	ノコ痕 なた?		両面に細いキズ
18	隅柱	E－4	1,070	131	34		手斧 鉋	ノコ痕		先端部手斧ケズリ 基部欠
19	隅柱	W－5	1,083	100	53		手斧 鉋	?		先端部手斧ケズリ
20	隅柱	S－7	1,237	75	44		手斧 鉋	ノコ痕		先端部手斧ケズリ

表－2　井戸板材観察表ＳＥ108



井戸板材の位置

5　溝跡（第13図）

溝跡として記録したものは22条ある。幅や長さ・堆積層・出土遺物など違いが認められる。個々の位置や形態については遺構配置図を参照されたい。主な溝跡について図示し、以下説明する。

ＳＤ１　調査区東側から西にむかって伸びている。幅約80cmほどで途中で曲がりながら、Ｂ区まで伸びる。ＳＤ25、ＳＤ26を切っている。Ⅲ層上面で確認した。深さは所々で変化があり、ＳＤ26と切り合うところでは24cmを測る。堆積土は自然堆積層で、この中に土器の細片を含む。酸化鉄を多量に含み、ＳＧ２河川跡の覆土が流れ込んだと思われる。断面は逆台形に近い。あかやき土器の小片が出土した。

ＳＤ71　Ⅱ層中位で存在がわかり、Ⅲ層上面で範囲や規模が確認できた。ＳＧ２河川跡の一部に相当し、深まりの部分が湿地のように残ったものである。東西130cm、南北110cmを測る。底は緩やかに傾斜し、レンズ状になっている。下層は泥炭質で繊維質を多量に含む土壌になっている。堆積土中から須恵器片191点・あかやき土器片780点・板状の木製品１点（第19図１）・砥石（第18図９）が出土している。

ＳＤ26　Ａ区を北東から南西にむけて掘り込まれている。ＳＤ１と切り合い、堆積土や切り合い方からＳＤ26の方が古い遺構であることがわかる。幅35cm、深さ33cmを測り、堆積土は２層確かめられ、炭片を含む。須恵器片20点・あかやき土器片79点出土した。

ＳＤ113　井戸跡の南側、一部ＳＫ96と切り合う。堆積土からＳＤ113が新しいことがわかる。幅は約105cmで浅い。底面は小さい凹凸が激しく見られ。牛の足跡と考えられる。須恵器86点、あかやき土器片178点、内黒土器片10点出土した。

ＳＤ142　Ｂ区の北側、Ⅲ層中で確認した。幅は最大で140cm、深さは最大で24cmを測る。堆積土は２層に分けられ、黒褐色土層（Ｆ１）から須恵器片58点・あかやき土器片338点と古銭『咸元通寶』が出土した。東側はＳＤ71に続くと思われる。

ＳＤ300　Ｄ区、建物跡（ＳＢ１）の北側に位置する。幅30cm確認面からの深さは30cmを測る。２層の堆積層があり、炭くずやあかやき土器の小片が多数出土した。湿地跡（ＳＤ71）に続く。直接、建物跡との関係はつかめなかった。溝跡はさらに西側（調査区外）に伸びている。

6　畝状遺構

Ｃ地区東側に５条の畝状遺構を検出した（ＳＤ191・ＳＤ192・ＳＤ193・ＳＤ194・ＳＤ195）。Ⅲ層上位の面で確認でき、さらに南北に続くようである。付近の小穴群（ＳＰ200～220）と一部重複しており小穴群よりも古い。５条の畝跡は、東西方向（N－70°－E）に50cm間隔で規則的に配列しており、ひとつのまとまりをなしている。長さは多様ではば全長の明らかな例で5.5m、幅は20cmである。断面はいずれも『U』字形であり、底面にはくぼみが多数見られる。堆積層は３層で堆積土からは須恵器片２点、あかやき土器片22点出土している。小片のため図示はできなかった。この種の溝跡は、畑作に関わる畝跡と考えられている。

7　河 川 跡

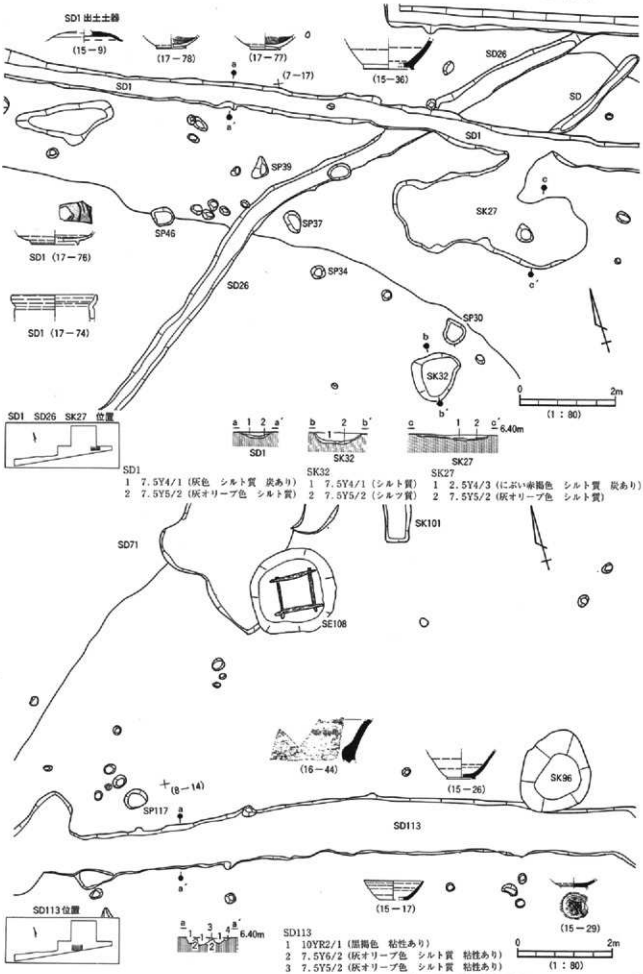
調査区北側と中央部、西端において河川跡とみられる落ち込みおよび堆積土が確認された。

ＳＧ２　中央部を東西に流れたことが堆積土等により確認される。鉄分の多く含む赤褐色砂層が河跡を埋め立てるように堆積しており、断面観察では７層まで確認できた。堆積土中からは遺物の出土はなかった。遺構の多くは、この河川跡を切っている。ＳＤ71はＳＧ２河川跡の広く深くて埋まりきらなかったところになっている。

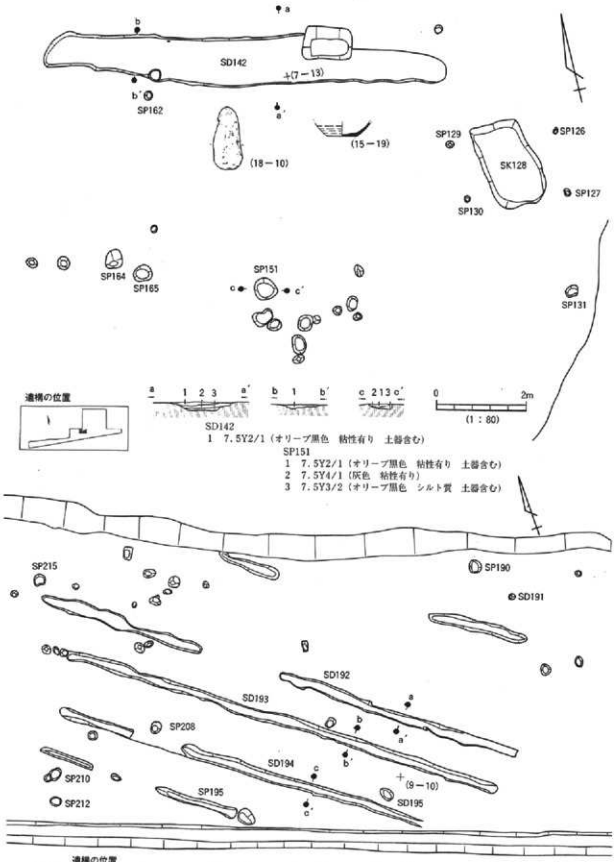
ＳＧ233　上層は褐色のシルト層であるが、途中から砂層になりレンズ状に堆積している。標高5.8mのラインになると湧水してくる。遺物は出土しない。

ＳＧ499　遺跡の西端に位置する。Ⅱ層下で確認できた。堆積層上位は黒褐色の腐食土になっており、植物繊維が含まれている。下層は漸移層をはさんで、グライ化した砂層になっている。腐食土層からは、平安時代～近世の土器片等が出土した。大部分は小破片で摩滅しており、流されたものが多いと思われた。

ＳＧ500　調査区の北側で確認した。遺跡の北側に東西に広がると思われる。黒褐色の腐食土、牛耕作跡の下は青灰色のグライ化した砂層が続く。自然堤防の縁の部分に相当する。黒褐色の腐食土層中から土器の小片が4,801点出土した。また縄文時代の石鏃も２点出土している。土器片はまとまりとしては分布しておらず、投げ捨てられてから流されていると考えられる。



第13図 遺構実測図(6)ＳＤ１・ＳＤ26他



第14図 遺構実測図(7)SD142・畝跡

Ⅳ 遺 物

今回の調査で出土した遺物には土器・土製品・石器・石製品・木製品などがある。またその他に牛の歯骨・植物遺体（くるみ等）なども出土した。遺物は総数28,718点を数えた。主な遺構ごとの遺物出土点数は表－１に記したが、全体の約40％は遺構確認までの段階での出土遺物である。遺構内では土壙（ＳＫ96、453、497）、溝跡（ＳＤ１、142）河川跡（ＳＧ500）からの出土数が多かった。以下、遺物を種類ごと取り上げ、その特徴をまとめる。

１ 土 器

向田遺跡からは小片が多いものの、整理箱にして22箱の土器類が出土している。大半は平安時代の土器であるが、一部中世や近世の陶磁器も出土している。以下、土師器・須恵器・あかやき土器・中世・近世陶磁器などについて順に説明する。

(1) 土師器

出土した土師器は形態から坏と高台付坏に分けられる。全て器内に黒色処理した内黒土器である。

a）坏　２点出土した（図版17－61、62）。２点ともに回転糸きり技法により底部切離しが行われており、内面黒色処理されているが摩滅してミガキ痕が確認できない。前者は底部に比して口径が大きく、後者はロクロ痕が明瞭に残り底部もヘラ削り調整を受けている。

b）高台付坏　２点出土している（図版17－77、78）。いずれも底部は回転糸きり技法により切り離され、内面黒色処理を受け、ミガキ痕が残る。77の資料には加熱による火ハネ痕が見られる。

(2) 須恵器

比較的遺存状態が良いため、図示できた点数が多かった。形態から坏・高台付坏・高台付皿・小壺・壺・甕に分類できる。

a）蓋（図版15－１～９）　全て破片資料で、ロクロ調整を受けている。形態的に断面の平坦なもの（１～６、８、９）と傾斜のあるもの（７）に二分できる。つまみの形態も中央部分が凸状と凹状のものが見られる。

b）坏（第15図10～22、第17図60）　底部切離しの「回転糸きり」と「ヘラ切り」によって分けられ、いずれも50％づつ同じ割合である。いずれもロクロ痕が明瞭に残っている。中には墨書土器が５点確認したが、文字として判読できたのは15の『生』のみである。

c）高台付坏（第15図23～26、29）　完全なものはなく、底部の破片資料のみである。底辺部から口縁にかけて急に立ち上がるもので底部ヘラ切りのもの（23～25）と底部が小さく斜めに立ち上がるものもので回転糸きりのもの（26、29）の２種類見られる。29の底部には墨痕があり、『全』と判読できる。

d）高台付皿（第15図27、28）　いずれも台部は高く、底部は回転糸切りにって切り離されている。28は焼成時に火膨れが発生し、底部が変形している。

e）壺（第15図30～40）　破片資料がほとんどで全体まで復元できるものはない。口縁部を

見ると短径広口のもの（30）と長径狭口（31）長径広口（34）のものがある。底部はすべて貼付高台で40以外はヘラ切りによる切り離しになっている。

f）甕（第16図41～55） 全体の形状を推定する資料がなく、形態など不明である。底部の破片などから丸底で器面にはタタキ痕とアテ痕による調整が見られる。

(3) あかやき土器

形態から坏・甕・鳩に分類できる。

a）坏（第17図58、59、63、64、65、66） 底部切離しは回転糸切り技法により、底径は小さく直接的に外反する。66の資料底部には『X』字状の線刻が見られる。

b）皿（第17図67） 緩やかに立ち上がり口縁が大きく広がる。底部は回転糸切りである。

c）鳩（第17図68～71） 口縁部４点図示した。口縁が直立するもの（68、71）と外反気味になるもの（69、70）の２種類見られる。

d）甕（第17図71～75） 底部（72）と口縁部（73～75）であるが、ロクロによるナデ調整が内面外面に施されている。小破片で全形を推測できるものはない。

(4) 施釉陶器（第17図76） 灰釉陶器の皿の破片が１点出土している、丁寧にロクロ調整されて底部もヘラ切り後、整形されている。内面に施釉前になされた線刻が認められる。

(5) 瓦（第17図79、80） 布目瓦片が２点出土している。両方とも外面にきロクロ調整されており、内面には布目痕が認められる。

(6) 中世・近世陶磁器（第17図81、82、87～89、91、92） 越前系のすり鉢片（81、82、84）と珠州系の甕片と近世のすり鉢片（83、85、86）、割高台（90）、ひょうそく（92）などが出土している。

2 土製品（第18図12～13）

土製品としては土錘が３点出土した（第18図12、13等）。長さ35mmのもので小型である。いずれもＳＤ１の溝跡からの出土である。

3 石製品（第18図１～10、14～19）

石製品としては、線刻礫・磨石・砥石・縄文時代の石器があげられる。線刻礫は長さ94cmほどのもので平坦面に多数の細かいキズが残されている。砥石は金属製品を対象に利用されたと思われ、かなり消費されて小さくなっている。おもに泥岩を素材としている。石鏃と石篦が出土している。有茎のもので縄文時代晩期以降のものと考えられる。

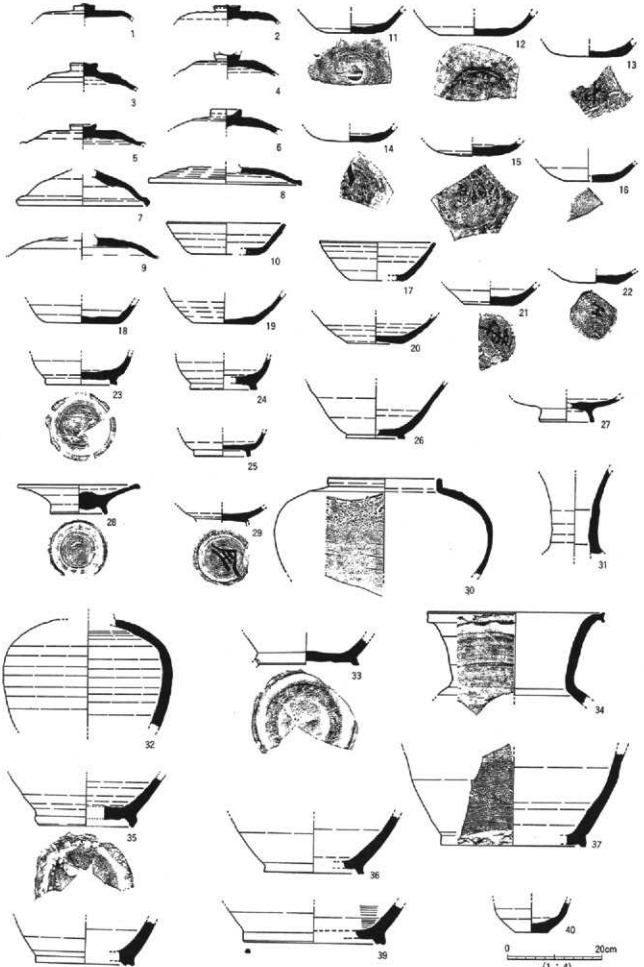
4 古銭（第18図20～24） ６点出土したが、遺存状態の良い５点を図示した。初鋳年は960～1086年頃で河川跡（ＳＧ500）、溝跡（ＳＤ142）から出土した。

5 木製品（第19図）

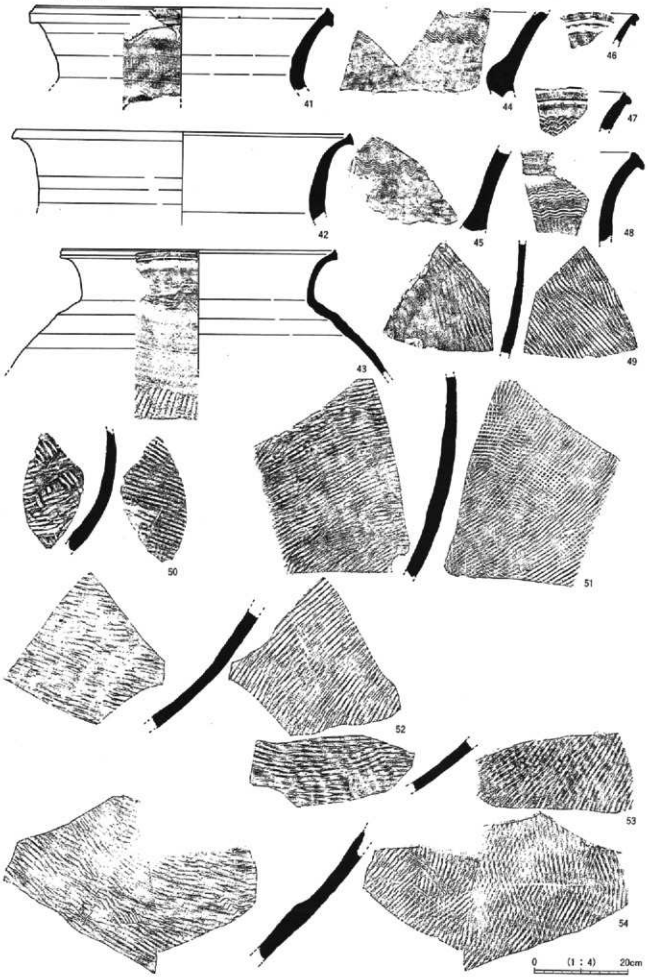
木製品としては、井戸板材のほかに斎串・箸・加工された板材などがある。

斎串は６点出土しており、長さ10.5cm～26cm、幅1.1cm～2.3cmを測る。いずれも井戸跡（ＳＥ108）からの出土で呪術的な使用が考えられる。７は側辺に刻み跡がある。

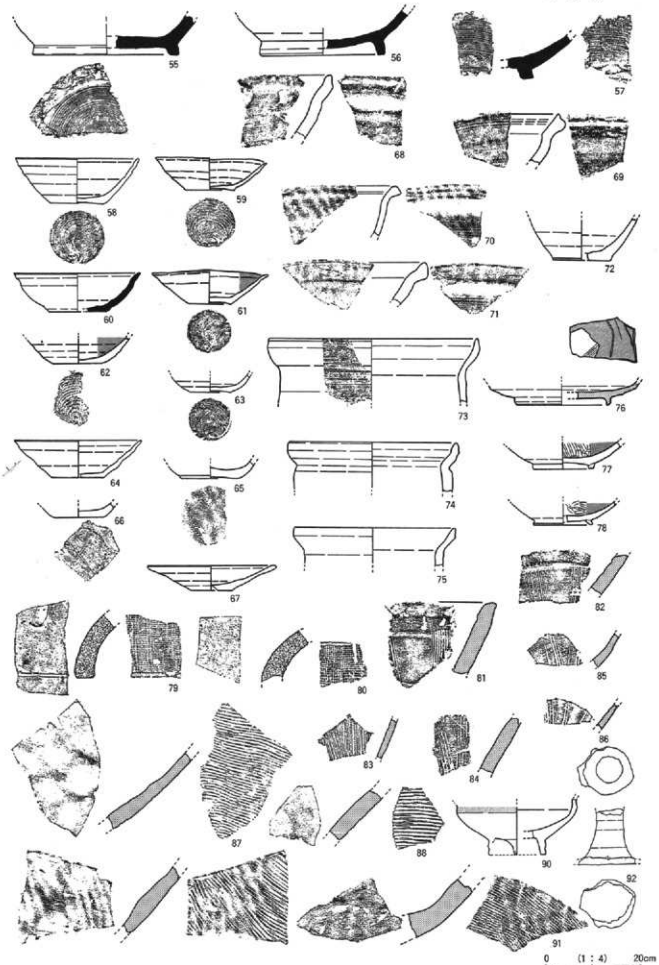
箸は10点出土したが、すべて折れているものや小片で４点ほど図示した。小刀等できれいに削っている。折れた後に井戸に投げ捨てたものと思われる。



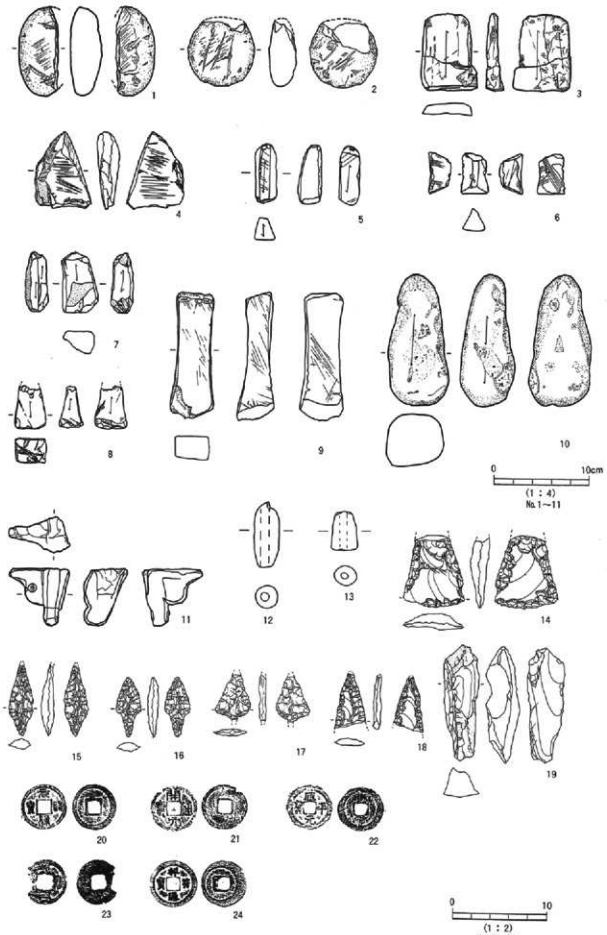
第15図　遺物実測図(1)土器実測拓影



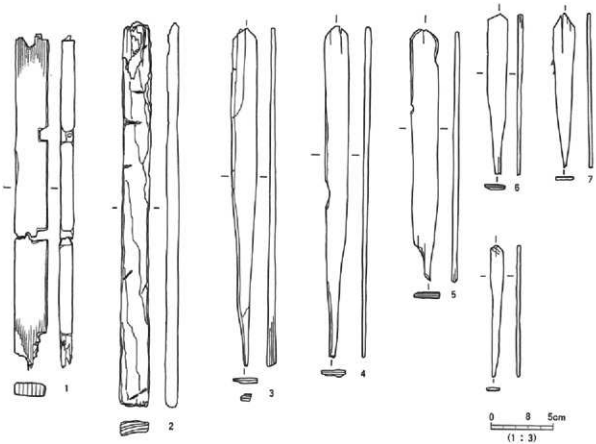
第16図　遺物実測図(2)土器実測拓影

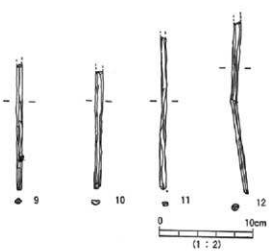


第17図 遺物実測図(3)土器実測拓影



第18図　遺物実測図(4)石製品他





第19図 遺物実測図(5)木製品

表－3 木製品観察表

挿図	遺物番号	種別	計測値mm 最大長	最大幅	厚さ	破損の有無 部位	調整	出土位置	備考
19	1	板状木製品	268	26	10	両端欠損	抉り2ヵ所 木釘有り 鉋	SD71 RW43	墨書あり 判読不可
	2	板状木製品	410	31	14		長軸方向にキズ多数	SE108 F18	
	3	斎串	218	20	3		鉋	SE108 F14	
	4	斎串	260	18	5		鉋	SE108 F14	
	5	斎串	200	23	5	基部欠損	鉋	SE108 F14	
	6	斎串	130	15	4		鉋	SE108 F14	
	7	斎串	124	14	2		側辺にキザミ跡	SE108 F14	
	8	斎串	105	11	－		鉋	SE108 F14	
	9	箸	136	5	－	欠損	小刀でのケズリ痕	SE108 F14	
	10	箸	93	6	－	欠損	小刀でのケズリ痕	SE108 F14	
	11	箸	97	4	－	欠損	小刀でのケズリ痕	SE108 F14	
	12	箸	120	5	－	欠損	小刀でのケズリ痕	SE108 F14	

表－4 遺物観察表(1)土器

挿図	遺物番号	種別	器種	計測値 mm 口径	底径	器高	器厚	底部切離し	調整技法 外面	内面	出土地点	備考
15	1	須恵器	蓋			14	6		ロクロ調整	ロクロ調整	SD71	
	2	須恵器	蓋			18	7		ロクロ調整	ロクロ調整	5－14Ⅲ	
	3	須恵器	蓋			27	7		ロクロ調整	ロクロ調整	5－16Ⅲ	
	4	須恵器	蓋			21	5		ロクロ調整	ロクロ調整	8－15Ⅲ	
	5	須恵器	蓋			21	12		ロクロ調整	ロクロ調整	B区	
	6	須恵器	蓋			23	7		ロクロ調整	ロクロ調整	5－14Ⅲ	
	7	須恵器	蓋			22	6		ロクロ調整	ロクロ調整	6－17Ⅲ	
	8	須恵器	蓋			18	5		ロクロ調整	ロクロ調整 酸化鉄付着	Ⅲ	
	9	須恵器	蓋			18	7		ロクロ調整	ロクロ調整	SD1	
	10	須恵器	坏	130	75	33	5	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	SE108	
	11	須恵器	坏		58	21	5	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	SP16	
	12	須恵器	坏		72	20	5	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	SK497	
	13	須恵器	坏		65	12	7	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	5－16	底部墨書あり
	14	須恵器	坏		70	11	8	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	SE108	底部墨書あり
	15	須恵器	坏		55	12	5	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	5－15	底部墨書あり[生]
	16	須恵器	坏		50	16	5	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	SK497	
	17	須恵器	坏	118	50	39	5	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	SD113	
	18	須恵器	坏		84	21	6	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	B区 RP15	
	19	須恵器	坏		63	29	6	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	SK453 RP23	
	20	須恵器	坏		56	29	4	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	SD71	
	21	須恵器	坏		55	18	7	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	B区	底部墨書あり
	22	須恵器	高台付坏		48	10	6	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	Ⅲ	底部墨書あり
	23	須恵器	高台付坏		74	38	7	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	9－15Ⅲ	
	24	須恵器	高台付坏		85	31	6	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	RP19	
	25	須恵器	高台付坏		60	24	4	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	SK497	
	26	須恵器	高台付坏	144	62	57	7	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	SD1 13	
	27	須恵器	高台付坏		60	26	4	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	B区	
	28	須恵器	高台付皿	128	62	30	6	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整 酸化鉄付着	B区	
	29	須恵器	高台付坏		52	16	4	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	SD113	墨書土器『金』
	30	須恵器	壺	123		100	5	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	SK453	
	31	須恵器	壺			96	7	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	SK497	
	32	須恵器	壺				11	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	SE108	
	33	須恵器	壺		112	27	9	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	SK453 RP25	
	34	須恵器	壺	194		94	9	ヘラ切り	ロクロ調整 ナデ	ロクロ調整	SK453 RP30	
	35	須恵器	壺		10	49	8	ヘラ切り	ロクロ調整 タタキ	ロクロ調整	SD71	高台付き
	36	須恵器	壺			62	8	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	SD1	高台付き
	38	須恵器	壺		108	43	12	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	RP12	高台付き
	39	須恵器	壺		160	44	10	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整	6－15Ⅲ	
	40	須恵器	壺		40	32	5	ヘラ切り	ロクロ調整	ロクロ調整 ハケ調整	4－15Ⅲ	
16	41	須恵器	甕	310		90	13		ロクロ調整 タタキ	ロクロ調整	B区Ⅲ	
	42	須恵器	甕	356		92	12		ロクロ調整	ロクロ調整	8－15Ⅲ	
	43	須恵器	甕	288		129	9		ロクロ調整	ロクロ調整	SK453	
	44	須恵器	甕			83	15		ロクロ調整 条線状タタキ	ロクロ調整 アテ	SD113	
	45	須恵器	甕			85	14		ロクロ調整 櫛書き波状文	ロクロ調整	B区	
	46	須恵器	甕			34	6		ロクロ調整 櫛書き波状文	ロクロ調整 アテ	SD71	
	47	須恵器	甕			39	9		ロクロ調整	ロクロ調整	SK497	
	48	須恵器	甕			96	13		ロクロ調整 櫛書き波状文5条	ロクロ調整 ナデ	B区Ⅱ	
	49	須恵器	甕			114	8		ロクロ調整タタキ櫛書き波条状文5条	ロクロ調整 ナデ	SK453	
	50	須恵器	甕			139	10		タタキ	アテ	SK497	
	51	須恵器	甕			210	14		タタキ	アテ	SK453 RP31	
	52	須恵器	甕			150	11		タタキ	アテ	SK453	
	53	須恵器	甕			71	9		タタキ	アテ	SK453	
	54	須恵器	甕			167	16		タタキ	アテ	SD40 RP7	
17	55	須恵器	壺		160	33	13	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	SP16	
	56	須恵器	壺		132	46	9		ロクロ調整	ロクロ調整	SK453 RP24	台付き
	57	須恵器	壺				12		ロクロ調整	ロクロ調整	SK497	台付き
	58	あかやき土器	坏	130	56	46	4	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	9－6Ⅲ	
	59	あかやき土器	坏	118	52	35	4	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	SK453 RP32	
	60	須恵器	坏	130	60	40	5	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	5－14Ⅲ	
	61	土師器	坏	122	46	34	4	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	SK453	内黒処理
	62	土師器	坏		54	25	5	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	SK453	底部ヘラケズリ内黒処理
	63	あかやき土器	坏		43	16	4	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	SD71	
	64	あかやき土器	坏	134	53	39	5	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	SK453	
	65	あかやき土器	甕		63	14	7	回転糸切り	ロクロ調整	ロクロ調整	SE108	

表－5 遺物観察表(2)土器

挿図	遺物番号	種別	器種	計測値 mm 口径	底径	器高	器厚	底部切離し	調整技法 外面	内面	出土地点	備考
17	66	あかやき土器	坏		55		6	回転糸きり	ロクロ調整	ロクロ調整	SE108	底部 Jのカマ印
	67	あかやき土器	皿	135	45	26	4	回転糸きり	ロクロ調整	ロクロ調整	SE108	
	68	あかやき土器	なべ				11		ロクロ調整	ロクロ調整 口縁部ハケメ	SD71	
	69	あかやき土器	なべ				10		ロクロ調整	ロクロ調整	SK96	
	70	あかやき土器	なべ				6		ロクロ調整	ロクロ調整 すす付着	SE108	
	71	あかやき土器	なべ				10		ロクロ調整	ロクロ調整	SE108	
	72	あかやき土器	甕		60	43	7		ロクロ調整	ロクロ調整	SK479	
	73	あかやき土器	甕	218			9		ロクロ調整	ロクロ調整	RP4	
	74	あかやき土器	甕	192			9		ロクロ調整	ロクロ調整 すす付着	SD1	
	75	あかやき土器	甕	170			8		ロクロ調整	ロクロ調整	SD1	
	76	灰釉陶器	皿		96		5	ヘラ切り	ロクロ調整 灰釉	ロクロ調整	SD1	灰釉 高台付き土器
	77	土師器	高台坏		65		6	静止糸きり	ロクロ調整	ロクロ調整 ミガキ	SD1	内黒処理加熱による剥離あり
	78	土師器	高台坏		80		5	回転糸きり	ロクロ調整	ロクロ調整 ミガキ	SD1	内黒処理
	79	瓦	丸瓦				18		ロクロ調整 ナデ	布目痕	RF37	
	80	瓦	丸瓦				19		ロクロ調整 ナデ	布目痕	BE	
	81	中世陶器	すり鉢				17		ロクロ調整	ロクロ調整 櫛書き条線	SF472	すす付着 越前系
	82	中世陶器	すり鉢				12		ロクロ調整	ロクロ調整 櫛書き条線		越前系
	83	近世陶器	すり鉢				6		ロクロ調整	ロクロ調整 条線状タタキ	AE	
	84	中世陶器	すり鉢				13		ロクロ調整	ロクロ調整 条線状タタキ	Ⅱ層	越前系
	85	近世陶器	すり鉢				8		ロクロ調整	ロクロ調整 条線状タタキ	SD497	
	86	近世陶器	すり鉢				6		ロクロ調整	ロクロ調整 条線状タタキ	5－16Ⅱ	
	87	珠洲焼	甕				11		条線状タタキ	アテ	AE	
	88	珠洲焼	甕				17		条線状タタキ	アテ	AE	
	89	珠洲焼	甕				15		条線状タタキ	アテ	CE	
	90	近世陶器	側高台		60	51	5		ロクロ調整 白釉	ロクロ調整	9－14Ⅱ	
	91	瑞洲焼	甕				20		条線状タタキ	アテ	BE	
	92	近世陶器	ひとう足				56		ロクロ調整 鉄釉		Ⅱ層	

遺物観察表(3)石製品他

挿図	遺物番号	種別	器種	計測値 mm 最大長	最大幅	厚さ	厚	破損の有無	調整	出土地点	備考
18	1	緑泥片岩		94	42	35		半分欠損	両面中央部を磨いている。	SD71F	細かいキズ有り 泥岩
	2	緑泥片岩		69	71	32		先端欠損	両面磨いている。側面にたたき痕。	AEⅡ層	細かいキズ有り
	3	砥石		81	53	11		折れ	両面磨いている。	AEⅡ層	砂岩
	4	砥石		81	57	23			両面側辺研いでいる。	5－14Ⅲ層	細かいキズ有り 泥岩
	5	砥石		62	23	24			全面にわたって研いでいる。	EEⅡ～Ⅲ	細かいキズ有り 泥岩
	6	砥石		43	25	23			全面にわたって研いでいる。	表採	細かいキズ有り
	7	砥石		63	38	24			側面を研いでいる。	AE	
	8	砥石		45	32	20		半分欠損	全面にわたって研いでいる。	6－15Ⅱ～Ⅲ	細かいキズ有り
	9	砥石		132	47	38			両面で研いでいる。	SD71F3	細かいキズ有り
	10	磨石		139	62	54			両面で研いでいる。	SD142 RQ42	
	11	火鉢の足		59					脚部に相当する。取り付け部分で破損。	BEⅢ層	
	12	土錘		35	13				楕円形	AEⅢ層	穴径 4m
	13	土錘		21	14				弾丸形	8－15Ⅲ層	穴径 3m
	14	石鏃		39	34	9		基部欠損	背面 腹面の周辺加工	SG500 RQ16	
	15	石錘		37	13	6			両面加工 茎部有り	SD71	
	16	石錘		33	15	6			両面加工 茎部有り	7－15Ⅲ	
	17	石錘		23	18	4		欠損	両面加工 茎部有り	4－15Ⅱ	
	18	石錘		28	16	3		欠損	両面側辺加工	8－15Ⅲ	
	19	石器調片		62	16	15				SG500	自然面あり
	20	古銭	『咸元通寶』	24		1				SD142	初鋳968年 北宋
	21	古銭	『開元通寶』	23		1				SD71	初鋳960年 南宋
	22	古銭	『元祐通寶』	25		1					初鋳1086年 北宋
	23	古銭	『不明』	23		1		一部欠損			
	24	古銭	『祥符通寶』	24		1				6－17	初鋳1009年 北宋

V まとめ

1 調査のまとめ

向田遺跡は、およそ10,000㎡の広がりを持つ。そのうち約3,500㎡について発掘調査を実施した結果、多数の遺構と遺物が出土した。調査の成果をいくつかまとめると以下のようになる。

まず第1に、発見された遺構は平安時代と中世以降の2時期に分けられる。平安時代の遺構は建物跡（ＳＢ１）・井戸跡（ＳＥ108）・土壙（ＳＫ96、453、497など）・溝跡（ＳＤ１、26、300など）で出土した遺物などから10世紀後半の年代が想定される。中世以降の遺構は、溝跡（ＳＤ113、118、142）・土壙（ＳＫ128）・牛耕跡などであり、溝跡からは古銭も出土した。遺物は少なかったが縄文時代の石器と土器片が河川跡（ＳＧ500）から出土している。河川上流域に縄文時代の集落が存在するようである。調査中、地表下50cm（標高6.2m）から埋没した自然木が5ヵ所から出土している。樹種はケヤキであり自然堤防上に安定して繁茂していたと思われる。ケヤキの植樹は屋敷林・防風林として、現在の集落でも見られる。

第2に井戸跡（ＳＥ108）の調査で出土した井戸枠板材の観察から、板材は建築部材の転用の可能性が高いことがわかった。枠組に関係の薄い加工や穿孔の観察は、当時の建物構造を探る上でも重要な分野となろう。

2 城輪柵跡周辺の井戸跡分類

出羽国府跡に擬定される『城輪柵』遺跡の周辺には、多数の古代から中世にかけての遺跡が存在し、これまで数多くの遺跡が調査されている。集落を構成する建物跡とともに、井戸跡も多数検出されている。両者はあたかも付随する関係にあるとも言える。以前、井戸の構造や年代について野尻　侃（1982）によって集成されたことがある。その後の資料の増加もあり、1982年以降の集成と分類を試みた（表－6参照）。

井戸跡は、掘り方の規模や井戸枠出土から、遺構精査前に大方判明することが多い。そして、調査して、我々が眼前にするのは井戸が廃棄された最後の状況が埋没したものである。よって、いかなる構造で、いつの時期で、どのような廃棄までのプロセスがあったのか探ることになる。以上の視点で、堆積層・遺物の位置や種類・井戸本体の構造を観察記録している。井戸は平面断面そして本体の構築プランがある。多様なパターンがあるため、個々の事例を区分し、その組み合せが井戸を構成するものとして分類を行った（第20図）。観察項目は、①掘り方平面②断面③井戸底④井戸本体とした。ただ、井戸板材など廃棄時に持ち出されるケースもあったり、土壙としたものでも素掘りの井戸であったりし、なお細部での検討が必要である。また、上部に横板井桁、下部に縦板と井戸本体を2段にしている例もある。曲物は井戸眼として多用される傾向がある。特殊なものに丸木舟の利用があげられる。井戸構築時のポイントは縦の保全と浄化にある。さらに細部の造作等観察する視点は多く、構造上の変化など課題は多い。

形態の分類（それぞれの組み合わせで構築されるが、すべてを表示しているわけでなく、その他の形態も存在する。）

掘り方（平面形）

A 円形　B 隅丸方形　C 楕円形　D 不整

掘り方（断面）

A　B フラスコ形　C カップ形　D 二段掘り込み

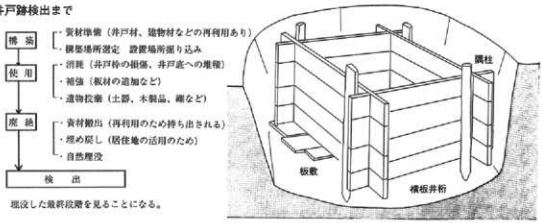
底部

A なし　B 石敷　C 板敷　曲物（井戸廻）

井戸本体

A 曲物 ※丸木舟の転用あり　B 横板井桁　C 縦板（横桟）　D 石積み

井戸跡検出まで



堆積した最終段階を見ることになる。

向田遺跡から検出した井戸跡（SE108）の復元想定

第20図　井戸跡分類図

表一6 庄内地方井戸跡出土例一覧(2)

＊1982 野尻 保「庄内地方の井戸跡出土例」「西田遺跡第2次発掘調査報告書」山形県教育委員会に続くもので1983から1989年まで収録。

番号	遺跡	遺構名	所在地	井戸本体					掘り方			出土遺物	発見年度
				素材	形態	構造	規模（深さ）	底	平面形	規模（深さ）			
49	庭田	SE110	酒田市大字庭田字中村	本組	方形	縦板 横桟	82×82(110)		方形	100×100(110)	須恵器 曲物		1983
50		SE62		本組	?	?	?		隅丸方形	155×130(105)	珠洲系陶器		
51	豊原	SE44	酒田市大字豊原字興田	素掘り	円形		径370(270)	曲物	不整方形	140×92(80)	越前焼		1983
52	関B2次	SE30	酒田市大字関字村ノ内	本組	方形	横板井桁 曲物	135×135(250)	石敷	不整方形	360×330(145)	須恵器 あかやき 曲物		1983
53		SE41		本組	方形	横板 隅柱	130×130(130)		不整楕円形	径400(200)	中世陶器 擂器		
54	沼田	SE10	酒田市大字大島田沼田	本組	円形	縦板	径46(12)	曲物	不整楕円形	180×160(120)	須恵器 あかやき		1984
55	新青蔵2次	SE250	酒田市大字新青蔵字家廻	本組	方形	?	?		不整楕円形	320×290(117)	木製品		1984
56		SE260		本組	方形	横板井桁	40×40(50)			径110(85)	須恵器 あかやき		
57	高阿弥田	SE2	酒田市大字後代字高阿弥田	本組	方形	縦板横桟 隅柱	68×65(120)	曲物	隅丸方形	165×140(105)	須恵器 あかやき曲物	著	1985
58		SE3		本組	方形	縦板横桟 隅柱	90×86(110)	曲物	方形	110×100(100)	あかやき 内黒		
59		SE4		本組	方形	横板井桁	80×75(30)		方形	95×95(35)	須恵器		
60		SE136		本組	方形	縦板横桟 隅柱	?		?		?		
61	手蔵田	SE2	酒田市大字手蔵田字小曽	本組	方形	横板井桁	50×50(130)	曲物	隅丸方形	110×110(120)	須恵器 あかやき 瓷車		1985
62	手蔵田	SE42	酒田市大字手蔵田字村上	本組	方形	縦板横桟	85×75(?)		楕円形	200×145(90)	あかやき 土師器		1985
63		SE45		本組	方形	横板井桁 縦板横桟	90×85(240)		隅丸方形	210×210(90)	須恵器 あかやき土師器		
64		SE167		本組	円形	縦板	径80(100)	曲物2	楕円形	156×142(140)	須恵器 あかやき 瓷		
65	下藤山	SE52	飽海郡大字下川原山字袖田	本組	円形	縦板 隅柱	径70(50)	曲物	円形	90×80(120)	近世陶磁器		1986
66	手蔵田	SE29	酒田市大字手蔵田字小曽	本組	円形	縦板 隅柱	径60(120)	石敷曲物	不整円形	180×180(120)			1986
67		SE33		本組	方形	縦板横桟 隅柱	80×80(55)	曲物	楕円形	160×160(165)			
68		SE119		本組	方形	縦板横桟 隅柱	90×90(120)	曲物	楕円形	200×200(110)	あかやき 須恵器		
69	南興野	SE54	酒田市大字新青蔵字大坪	本組	方形	横板井桁 縦板横桟	108×80(100)		隅丸方形	254×215(228)			1986
70		SE61		本組	方形	横板井桁	(100)		円形	180×170(85)	土器42点		1987
71		SE63		本組	方形	横板井桁	70×70		円形	200×180(185)	内黒 須恵器瓷車など		
72		SE203		本組	円形	丸木舟利用	120×60		不整円形	200×190(166)	内黒 須恵器あかやき		
73	桜林興野	SE84	平田町大字桜林興野字東田	本組	方形	縦板横桟	100×100(75)		方形(切り合い)	120×110(75)	中世？		1987
74		SE94		本組	方形	縦板			隅丸方形	135×120(88)	板小片		
75		SE91		?									
76	上曽根	SE93	酒田市大字上曽根字上曽根	本組	方形	縦板横桟	65×65(132)		円形	180×170(110)			1987
77	生石2	SE101	酒田市大字生石字細野新田	本組	方形	横板井桁	90×90(100)		方形	170×170(100)	須恵器 あかやき		1987
78		SE250		本組	方形	横板井桁	90×90(60)		方形	220×210(80)	須恵器 あかやき		
79		SE490		本組	方形	横板井桁	100×100(40)		方形	200×180(70)	須恵器 あかやき		
80	生石4	SE1	酒田市大字生石字細野新田	本組	方形	縦板 横桟 隅柱	70×70(180)	石敷	方形	190×150(200)	須恵器3点		1987
81		SE2		本組	方形	縦板 丸木舟舟	70×70(130)		隅丸方形	105×95(94)	須恵器 著 瓷車		
82	大浦	SE171	遊佐町大字小淵田字大浦	本組	円形		径50(20)	石敷曲物	楕円形	120×90(50)	須恵器 中世		1988
83		SE186		本組	方形	縦板 斜め板	70×70(50)		?	90×90(80)			
84		SE205		本組	方形	縦板横桟	100×100(50)	石敷	長方形	320×60(70)	かわらけ 瓷器		
85		SE338		本組	方形	縦板横桟	100×100(50)		方形	160×160(70)			
86	青興野2次	SE64	酒田市大字新青蔵字南大坪	本組	方形	縦板横桟	120×110(200)		楕円	150×130(98)	須恵器 墨書土器 瓷車		1988
87		SE101		本組	方形	横板井桁	90×80(54)		不整楕円形	165×160(147)	須恵器 あかやき 瓷車		
88		SE104		本組	円形		径36(20) 径42(35)	曲物2	隅丸方形	140×110(82)	あかやき 瓷車		
89		SE497											
90		SE627							円形	?	須恵器 曲物		
91	熊野田	SE110	酒田市大字熊野田字高砂	本組	方形	横板井桁	110×105(?)		不整円形	130×130	須恵器 あかやき 黒		1988
92	手蔵田	SE41	酒田市大字手蔵田字村上	本組	円形	曲物	径50(55)	曲物	楕円形	140×140(120)	須恵器 あかやき		
93		SE584		本組	?		径90(150)		楕円形	130×130(?)	須恵器 あかやき		
94		SE639		本組	方形	縦板横桟 隅柱	56×45(110)	曲物	?	90×90(100)	須恵器 あかやき		
95	桜林興野	SE64	平田町大字桜林興野字東田	本組	方形	縦板 隅柱 曲物	80×70(80)		楕円形	100×80(90)	須恵器 あかやき		1988
96	矢馳	SE15	鶴岡市	本組	方形	縦板横桟 曲物	80×80(120)	曲物	円形	170×170(120)	掘り方から土師器片		1988
97	大鳥新田	SE33	酒田市大字大鳥新田字長の下	本組	円形	曲物 たが	?		不整円形	110×100(115)	中世		1989
98		SE88		本組	?		60×60(100)		円形	120×120(120)	中世		
99	大鳥新田	SE34		本組	方形	縦板横桟 曲物	55×55(140)	石敷曲物	隅丸方形	160×160(140)	須恵器 あかやき片		1989
100		SE44		本組	方形	横板井桁 縦板	60×60(100)		円形	120×120(120)	須恵器 あかやき片		

報告書抄録

ふりがな	むかいだいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	向田遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第34集
編集者名	石井浩幸　斉藤　健
編集機関	財団法人　山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999－31　山形県上山市弁天二丁目15番1号　TEL 0236－72－5301
発行年月日	西暦　1996年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
向田（むかい だ）	山形県（やまがたけん） 酒田市（さかた し） 大字本楯（おおあざもとたて） 字向田（あざむかい だ）	6204	平成6年度 登録	38度 58分 10秒	139度 53分 00秒	19950508 ～19950706	3,500	県営ほ場 整備事業 （西荒瀬地区）

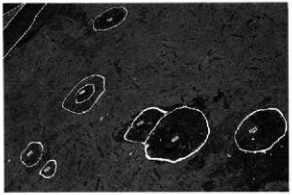
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
向田	集落跡	平安時代	掘立柱建物跡 土壙 井戸跡 溝跡 畝跡 河川跡	須恵器（甕、坏、壺、甕） あかやき土器（坏、甕） 砥石　古銭 斎串　箸 井戸枠材	自然堤防上の集落。板敷きの井戸跡を検出。

図　　版

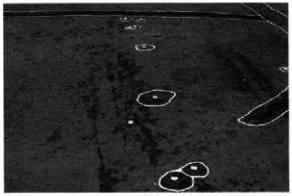
遺跡上空から（航空撮影）

調査風景（遺構検出）

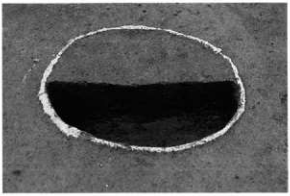
ＳＢ１（掘立柱建物跡）南から



柱跡　ＳＰ312～318



Ｄ区　ＳＰ271～273・ＳＰ304～308



ＳＰ16

ＳＰ17

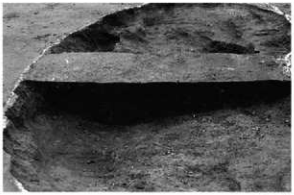
S K 453　遺物出土状況

S K 96

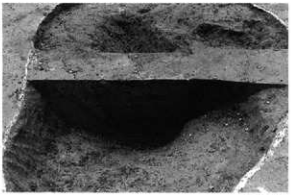
S K 497

S K 128

S K 32



ＳＤ１



ＳＤ26

Ａ区

ＳＤ240

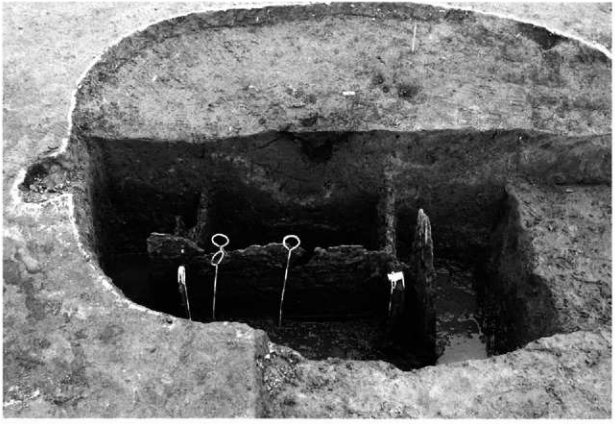
畝跡群（ＳＤ192～194）

Ｂ区　牛耕跡

木製品（第19図１）出土状況ＳＤ71内

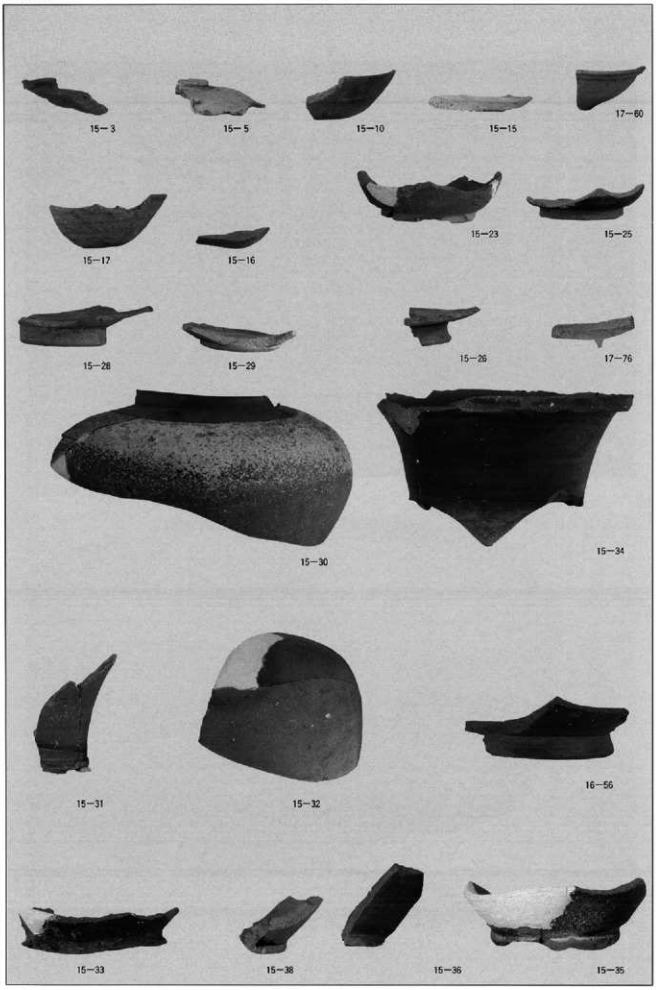
須恵器壺底出土状況（第15図23）

ＳＥ108（井戸跡）検出状況



ＳＥ108（井戸跡）土層断面

図版 6


15－3
15－5
15－10
15－15
17－60
15－17
15－16
15－23
15－25
15－28
15－29
15－26
17－76
15－30
15－34
15－31
15－32
16－56
15－33
15－38
15－36
15－35

16—49表

16—50表

16—53表

16—49裏

16—50裏

16—53裏

17—58

17—59

17—64

17—63

17—61

17—72

17—65

17—70表

17—71表

17—70裏

17—71裏

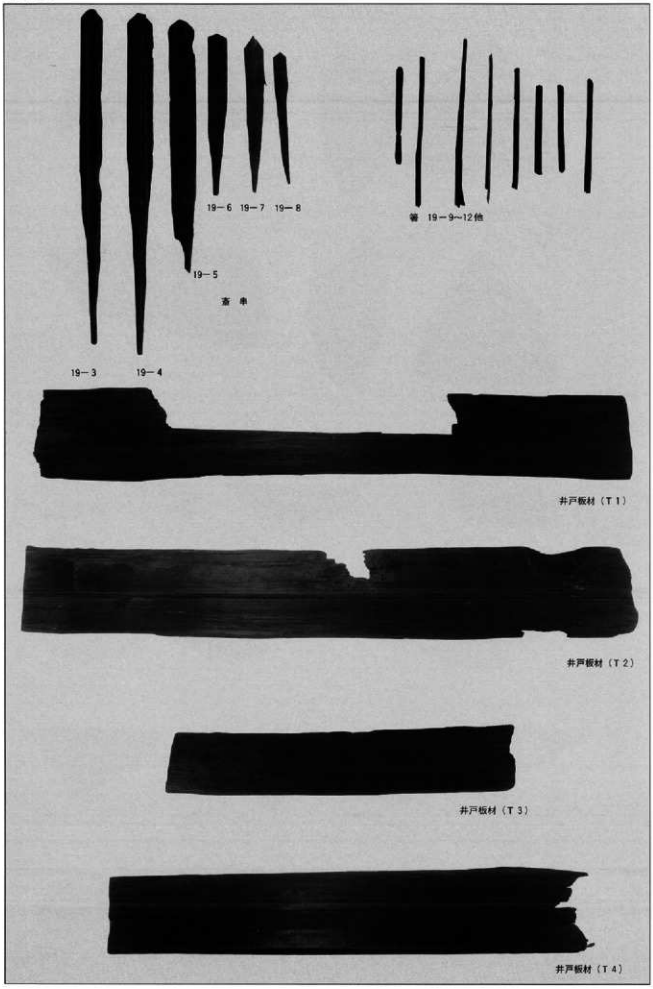
17—74表

17—75表

17—74裏

17—75裏

図版 8



山形県埋蔵文化センター調査報告書第34集

向田(むかいだ)遺跡発掘調査報告書

1996年３月31日　発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化センター
〒999－31　山形県上山市弁天二丁目15番１号
電話　0236－72－5301
印刷　㈱大風印刷